

高崎市文化財調査報告書第206集

高崎城XVII遺跡

2006

高崎市教育委員会

序

私たちのまち高崎市は、古くから中山道、三国街道などの宿場町・商都として発展してきました。現在でも上越新幹線・長野新幹線や関越自動車道・上信越自動車道などの高速交通網が整備され、北関東最大の「交通拠点都市」として躍進しております。

今年度高崎市は1月23日に倉渕村、箕郷町、群馬町、新町と合併し新生高崎市となりましたが、地方分権の新たな担い手としての役割をこれまで以上に果たせよう、日々努力を重ねていきたいと考えております。

高崎市の歴史をひもといてみますと、猛将として知られた井伊直正が戦国時代の和田城を修築して高崎城を築造したことが一つのエポックとなります。その後高崎城は、城主安藤重信以降、三代にわたる修復で河川を堀として活用した堅固な城として明治の時代まで残っていましたが、明治10年に陸軍の施設が建設された際に「三層の櫓」以下の建物が取り壊されて現在に至っています。

文化七年の高崎城絵図を拝見いたしますと、国立高崎病院の敷地は威徳寺及び興禅寺の二寺が城内に取り込まれており、当初より貴重な文化財が発見されることが期待されておりました。

この資料が、高崎市及び近隣地域の地域史解明のため十分活用されることを切に願うとともに、発掘調査と報告書刊行に尽力した関係者の方々に、深く感謝の意を表し序といたします。

平成18年3月31日

高崎市教育委員会

教育長 砂 田 威 夫

例 言

- ・本書は国立高崎病院の新病棟建設に伴って事前調査された高崎城Ⅷ遺跡(高崎市遺跡番号390)の発掘調査報告である。
- ・本遺跡は高崎市高松町36-1に存在する。
- ・発掘調査及び整理は高崎市教育委員会が行った。
- ・本遺跡の発掘調査は平成17年7月11日から10月25日まで行った。
- ・発掘調査は黒田晃・住田常生の2名が行った。
- ・本遺跡の整理作業は平成17年10月20日から12月25日まで行った。
- ・本書の編集は黒田晃が行った。
- ・遺構の写真撮影は、黒田晃・住田常生が行った。
- ・基準点測量は株式会社測研に委託した。
- ・遺構平面図作成及びデジタルトレースは、株式会社測研に委託した。
- ・遺物の実測・写真及びデジタルトレースは、有限会社前橋文化財研究所に委託した。
- ・出土した遺物及び各種原図は高崎市教育委員会が保管している。

凡 例

- ・遺構番号は、原則として発掘調査時に付したものを使用した。
- ・遺構挿図中に使用した方位記号は、座標北を示している。座標値は国際座標を使用している。
- ・土層注記の色調は、農林省農林水産技術会議事務局 (財)日本色彩研究所監修「標準土色帳」を使用した。
- ・遺構・遺物実測図の縮尺は原則として以下の通りとし、スケールを入れて示した。

報告書中の各遺構平面図 1/80を基本とする

遺物実測図

土器 1/3を基本とし、大型品は 1/4

石製模造品など小形のもの 1/2

銭 4/5

大型石製品 1/5

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

1 遺跡の概要	
1-1 調査に至る経緯	1
1-2 発掘調査の方法と経過	1
2 遺跡の位置と環境	
2-1 遺跡の位置と周辺の地形	2
2-2 周辺の遺跡	2
3 高崎城Ⅷ遺跡の調査	
3-1 調査成果の概要	4
3-2 1区の遺構	6
3-3 2区の遺構	21
3-4 調査のまとめ	29

挿 図 目 次

第1図 高崎城を中心とした周辺遺跡	3
第2図 調査地点詳細図	4
第3図 調査区全体図	5
第4図 1～3号溝・1号土坑	7
第5図 1・2・4・5号溝出土遺物	8
第6図 3～9・12号溝・3・4号土坑	9
第7図 9～11・13・17号溝 5～8号土坑	11
第8図 6・7・8・18号溝出土遺物	12
第9図 14・15・16号溝	13
第10図 18・19号溝	14
第11図 20号溝 9・10号土坑 20号溝出土遺物	15
第12図 21号溝 21号溝出土遺物	16
第13図 4・11～13・19号土坑出土遺物	19
第14図 11～20号土坑 22～26号溝	20
第15図 1号遺物集中地点出土遺物	23
第16図 2号遺物集中地点出土遺物(1)	24
第17図 2号遺物集中地点出土遺物(2) 3号遺物集中地点出土遺物(1)	25
第18図 3号遺物集中地点出土遺物(2)	
第19図 22・27～31号溝 21～24号土坑	27

1 遺跡の概要

1-1 調査に至る経緯

国立高崎病院では、南病棟・教育研修棟などを取り壊して改築し、新たな設備の整った病棟を築造することが決定した。平成15年には駐車場として利用していた病院北端部の発掘調査を行い、南病棟から移る仮設病棟の建設を行った。また平成17年には南病棟などの取り壊しが開始された。

高崎市教育委員会文化財保護課では、この計画地が高崎城の範囲内であるため、開発部局と遺跡保存のための協議を重ねた。しかし既に計画変更の可能性は残されていないことから、やむを得ず施設建設予定地の発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

1-2 発掘調査の方法と経過

調査対象地は約3,000㎡である。病院敷地内という制約もあり表土を全て積んでおく場所も確保できないため、調査区を1区・2区に細分し、それぞれの区で土置き場などを確保しながら調査を進めた。最初に調査した南側の調査区を1区、北側の調査区を2区とし、両区には世界測地系に即した杭を株式会社測研に委託して打ち、図面作成の基準とした。

調査対象地の表土除去には重機を使用し、遺構確認作業及び覆土除去作業については人力に拠った。

個別遺構の調査では基本的に主軸方向に直行する方向のベルトを残して掘削を行い、土層断面図と遺構平面図を作成した。遺物の出土位置に関しては、光波測距儀を用いて座標値を残した。図面作成においては、簡易遣り方測量と平板測量、光波測距儀によるドットマップの作成などを併用した。

写真は35mmモノクロ・カラーリバーサルフィルムを用いて担当者が撮影した。

調査日誌抄

平成17年7月11日	調査開始 調査区周辺に危険防止のフェンス設置
平成17年7月13日	作業員による遺構確認作業開始
平成17年7月15日	1・2号溝・1・2号土坑の調査
平成17年7月19日	2号溝より土師器甕の口縁部出土 遺構は近世のものと考えられるが、遺物は古い
平成17年7月22日	5号溝・6号溝より土師器片が多く出土
平成17年8月1日	雨により遺跡が水没 ポンプを入れて調査を進める
平成17年8月5日	水汲み継続 降下した雨が周囲から遺跡の内部に集まり、水位が下がらない
平成17年8月31日	5号土坑(井戸)の調査
平成17年9月8日	18号溝の調査開始
平成17年9月16日	21号溝の調査開始
平成17年9月26日	2区の調査開始
平成17年10月3日	13号土坑・1号遺物集中地点の調査
平成17年10月12日	2・3号遺物集中地点遺物上げ
平成17年10月12日	22・23・24号土坑調査
平成17年10月19日	現場発掘作業終了
平成17年10月21日	2区測量
平成17年10月25日	現場埋め戻し

2 遺跡の位置と環境

2-1 遺跡の位置と周辺の地形

高崎城Ⅶ遺跡は高崎市街地西方1kmの高崎城内に所在する。

高崎市は、関東平野の最奥部に位置し、市の東南部には前橋台地(前橋・高崎台地)と呼ばれる低台地が広がっている。遺跡の西は烏川の段丘崖となっており、その比高差は10m以上である。

高崎市街地はこの前橋台地上に形成されており、高崎城及びその周辺施設も前橋台地上に立地している。

前橋台地は前橋泥流の堆積面に当たる。前橋泥流は浅間山の山体崩壊がその起源とされ、渋川市・前橋市・高崎市・伊勢崎市を結ぶやや崩れた三角形の形状を呈しており、その起源はかつて24,000年前とされていたが、前橋市上細井町で泥流下に始良丹沢火山灰層(21,000年～25,000年前)が発見されたことにより、前期の年代よりも新しいことが確認された。また群馬郡小野上村では、泥流の上位と下位に板鼻褐色軽石群(17,000年～21,000年前)が認められたことから、前橋泥流の堆積年代は約20,000年前であるという説が有力である。

前橋泥流層の下位には、前橋砂礫層と呼ばれる円礫を主体とした砂礫層が100m以上の厚みで堆積している。この砂礫層は、過去の利根川による扇状地堆積物堆積物と考えられ、所々に火山砕屑物やシルト層を含む。

本遺跡では関東ローム層は検出されていない。

文化七年六月の『御城内外惣絵図』によれば、調査区は高崎城三ノ丸(三ノ郭)南西端にあたり、高崎病院の西半は威徳寺、東半から高崎市役所西側にかけは興禅寺の寺域となっている。このように城内に多くの寺社を取り込んでいるのが高崎城の特徴の一つとされている。

威徳寺は天台宗の寺で、宝永六(1709)年徳川五代将軍綱吉の死去により、高崎城主大河内輝貞がその追福のため城内に開基した。輝貞は、徳川五代将軍綱吉の信任が厚く、老中という幕府の要職に任じられた人物である。この寺は大河内家の祈願所となり、大河内家累代の位牌が安置されていた。この堂宇は宝永七(1710)年高崎から村上へ輝貞が移封し、享保二(1717)年に再び高崎に転封となった。威徳寺は明治維新後には廃寺となり、西の崖上に一時移転したが、城内が明治九年陸軍省の所管となると赤坂村へ移転を申請、明治四十一年には富岡市施無畏寺と合併した。現在も大河内家の位牌を安置している。

また明治四十五年に光徳寺本堂脇に内陣を移築、この内陣は現在高崎市の重要文化財に指定されている。

興禅寺は曹洞宗の寺で、創始は治承元(1177)年とされている。高崎城が築かれると城内の三ノ丸に移ったが、享保二(1717)年に前栽町唐澤畑地藏堂付近に墓地を移動、さらに天保十(1839)年に堂宇を現在の下横町に移した。

2-2 周辺の遺跡

遺跡の周辺では弥生時代以降、近世高崎城関連の遺跡に至るまで、各時代の遺構が連綿と検出されている。

遺跡周辺では旧石器の調査例は認められない。市内の旧石器検出例も少なく、大八木町雨壺、鼻高町少林山台、鼻高町坂上北、大八木町融通寺の4遺跡で石器が出土、あるいは採集されているのみである。石器の形態は全て槍先形尖頭器である。

遺跡周辺には縄文時代の遺跡もあまり分布していない。観音山丘陵と呼ばれる岩野谷丘陵から碓氷川対岸の八幡台地など、台地から丘陵にかけて分布は見られるが、縄文中期後半以降遺跡数が増加し始めると、高崎台地上の烏川低地帯や井野川沿岸、相馬ヶ原扇状地末端部の舌状台地や微高地、さらには低湿地的な地層状況下までまとまった土器が出土する状況となる。

弥生時代の遺跡としては中期後半の標識遺跡である竜見町遺跡を上げることができる。同じ台地上では稲荷町Ⅰ遺跡・浜尻遺跡から、弥生中期後半の住居が発見され、林製作所遺跡・城南小学校遺跡・高崎競馬場遺跡では同じ時期の土器が検出されている。

高崎市内では弥生後期の樽式土器を出土する遺跡が多いが、高崎城周辺地域ではほとんど見られず、住居も確認

確認されていない。

古墳時代に入ると、遺跡数が増加する。高崎城Ⅲ遺跡(8)では、土坑内より石田川式の土器群が出土し、高崎城Ⅴ遺跡(10)では古墳時代後期の竪穴式住居跡が検出された。

中世に入ると、高崎城築城以前に烏川崖上に和田城が築造された。和田城の詳細は、その後築城された高崎城に取り込まれていったため、明らかなではない。

慶長三(1598)年に井伊直正は高崎城を築いて箕輪城から移ってきた。この移城には徳川家康の命があったとされている。城は和田城を取り込み、本丸・二ノ丸・三ノ丸を囲郭式に配列し、大手門は東向きに開き、箕輪から移した連尺町を大手前に置いて、計画的に城下町を形成した。

高崎城跡はこれまでに大小16地点で発掘調査が行われ、陶磁器などの武士の生活用品が多数検出された。昭和60年に行われた高松中学校での調査(1)・高崎城三ノ丸遺跡(7)では、幅18m・深さ4mほどの二ノ丸堀が検出され、堀底からは障子堀の構造が確認された。また昭和61年の高松中学校校庭の調査(1)では、赤坂中門土橋下から石製暗渠が発見され、土橋両側の堀は暗渠で結ばれていたことが判明した。当遺跡に隣接する高崎城ⅩⅦ遺跡(13)からは、二ノ丸堀の一部が検出され、絵図の配置が正しいことが証明された。

その後、明治六(1873)年には高崎城全域が陸軍用地となり、東京鎮台高崎分営が設置された。以後軍政の改革に伴って、明治八(1875)年に歩兵第三連隊第一大隊、明治七(1884)年に歩兵第十五連隊が設置され、昭和二十(1945)年の終戦に至るまで、一貫して日本陸軍の衛戍地であった。従って明治時代以降検出される遺構はそのほとんどが歩兵第十五連隊のものである。高崎城Ⅹ遺跡(7)からは第2兵舎跡・地下壕などの遺構の他、地下壕内よりさまざまな兵器・認識票など、当時の軍隊生活を物語る貴重な資料が数多く出土している。



第1図 高崎城を中心とした周辺遺跡

3 高崎城XVII遺跡の調査

3-1 調査成果の概要

調査区は南と北に分割されており、南側を1区・北側を2区と呼んでいる。

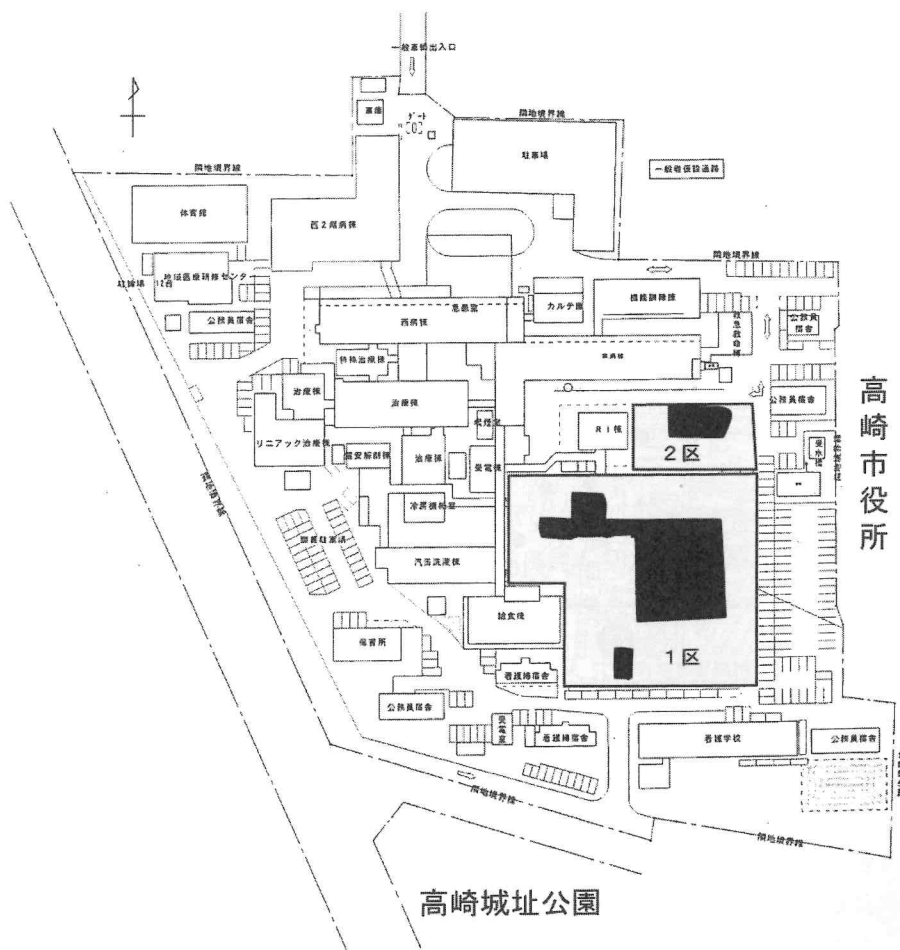
1区は調査前に病棟が建っていた区域であり、旧病棟の基礎などで大部分が破壊を受けていた。また2区は駐車場であった場所で、建物による掘削が無かったため比較的遺構の残存状態が良好であった。

絵図等で見ると、調査区は興禅寺と威徳寺が建っていたが、移築に伴って建材とともに基礎の石も運ばれたと考えられ、寺の建物は遺構として検出されなかった。

両区に共通して、中・近世の建物に伴う小規模な溝及び井戸等が検出されたが、出土遺物に陶磁器類はやや少なめで、弥生時代・平安時代の土器を中心とした古い時代の遺物がまとまった形で発見された。特に2区においては3か所の遺物集中地点(平安2・弥生1)が確認され、それ以外にも弥生中期の甕を出土する土坑や完形品の平安時代須恵器杯2個体を出土した土坑などが検出された。

遺構で特徴的だったのは、1区で検出された1号土坑をまず上げることができる。この遺構は、ビルの基礎によって南半分が破壊を受けていたが、覆土中に石垣で使用したと推定される大形の円礫と拳大のぐり石が検出されており、恐らく近世の石垣が付近にあったことが推定される。

また、幅50cm前後の多数の区画溝の他に、幅2m前後の大形の溝(18号溝・20号溝など)が調査区東端で検出された。これは興禅寺と威徳寺を分ける大形の区画溝であった可能性が考えられる。



第2図 調査地点詳細図

3-2 1区の遺構

1区は南側の調査区で、旧病棟が建てられていた部分である。病棟の建っていた部分を避け、逆L字状に掘削を行った。調査はトレンチ状に掘削した北西隅から行われた。

①溝

1区からは大小多数の溝が検出された。これらの溝は建物を区画する区画溝であると推定され、溝底に水が常時流れていたような痕跡は認められない。また覆土はどの溝も黒褐色土が充填されており、積極的に溝同士の間を重複関係を指摘できない。従って、ほぼ同時期に存在し、同時期に廃絶したものと考えられる。溝出土の遺物を見ると、カワラケや土師器、弥生土器などの小片が多く、陶磁器類は少ない。

1号溝

調査区北西の南隅から北東方向に伸びる溝である。幅は1.3m・深さ30cmで長さ6m程が確認されており、北端は1号土坑及び攪乱によって破壊を受けている。溝の中央には掘り込みが2か所見られる。

実測可能な遺物は、口径7～10cm・器高2～2.9cmのカワラケが6点出土している(第5図1～6)。これらはいずれも中世のものであると考えられる。

後述する20号溝中から中世銭及びカワラケが出土し、墓の可能性が高いことを考え合わせると、カワラケは溝の遺物ではなく、墓が溝周辺に存在していたものと推定される。

2号溝

調査区をほぼ東西方向に伸びる溝で、西端を1・2号土坑に破壊を受け、東端は4号溝に連続する。3号溝が斜めに横切るが土層の観察では新旧関係が確認できなかった。溝幅は70cm・深さは15cmで、検出された長さは約6.2mを計測する。

カワラケが2個体溝底に並ぶような形で検出された(第5図7・8)。1号溝のものと比較すると小形品で径6.9cmと7.2cm・器高は1.8cmである。

3号溝

2号溝・4号溝と重複するが、断面で新旧関係が確認できない溝である。幅は70～80cm、深さは40cmを計測する。東南隅は攪乱によって破壊を受けている。

溝の掘られている方向をみると、1号溝とほぼ直行するようである。

遺物は小片が多く、実測できるものは存在しなかった。

4号溝

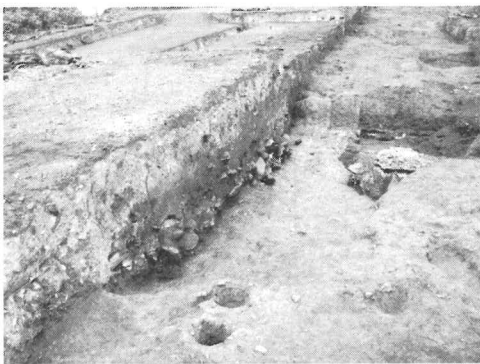
幅2.2m～2.4mと比較的大形の溝で、深さは40cmを計測する。溝底は平坦で、小石やロームを含む黒褐色土で一気に埋め戻されている。2・3・5号溝と重複関係にあり、5号溝より新しいことがセクションから確認できるが、2及び3号溝との新旧関係は不明である。

弥生中期の壺2個体と、土師器甕1個体が実測可能である(第5図9～11)。

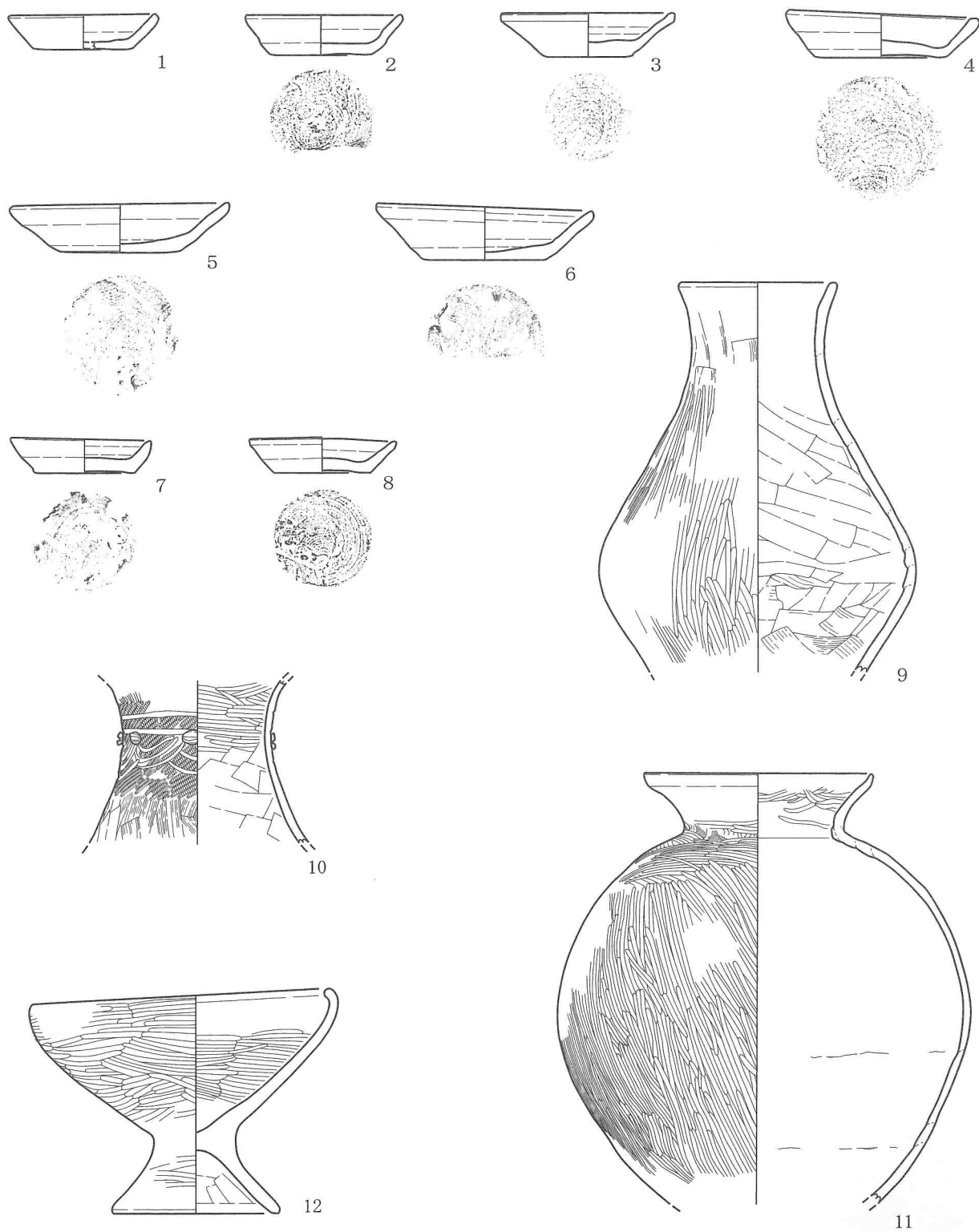
5号溝

4号溝と重複関係にあり、4号溝より古い。3号溝とほぼ並行する角度で伸びるが、溝底は幅が狭く壁の立ち上がり角度が急角度であるのが特徴である。北西端は4号溝に、南東端は攪乱で破壊を受けている。

遺物は土師器高杯が実測可能である(第5図12)。杯部内外面ヘラミガキで、外面に赤色塗彩が施されている。

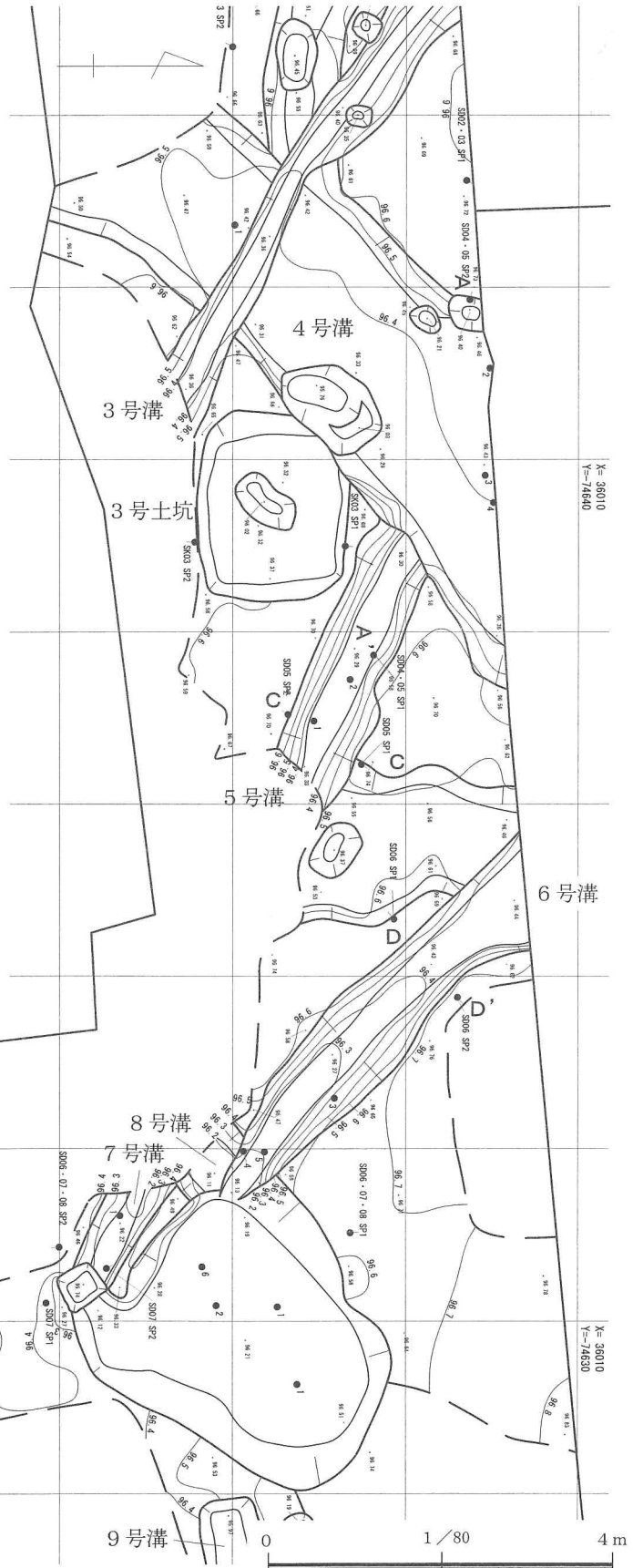


- 7 -



- | | | |
|------|-----|-----|
| 1~6 | 1号溝 | 1/3 |
| 7・8 | 2号溝 | 1/3 |
| 9~11 | 4号溝 | 1/4 |
| 12 | 5号溝 | 1/3 |

第5図 1・2・4・5号溝出土遺物

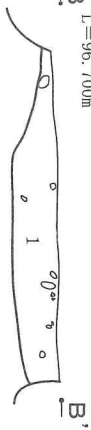


4・5号溝
A L=96,900m



1. 黒褐色土 ローム粒を含み、10mm前後のローム
ブロックを少し含む(5号溝)
2. 黄褐色土 ロームと黒褐色土の混土(5号溝)
3. 黒褐色土 ローム粒小石を含む(4号溝)
4. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む(4号溝)
5. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む(4号溝)

4号土坑
B L=96,700m



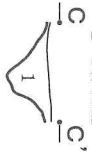
1. 黒褐色土 ローム粒、2～5mmの小石を含み
3～20cmの柱穴に使用した石を含む

6号溝
D L=96,900m



1. 黒褐色土 ローム粒を含み、円礫が見られる
2. 黄褐色土 ブロック状のロームを主とし、黒褐色土を含む

5号溝
C L=96,900m



1. 黒褐色土 5mm大の小石を少し含む、
ローム粒を僅かに含む

第6図 3～9・12号溝 3・4号土坑

6号溝

5号溝の東で3号溝にほぼ並行して存在する。幅90cm、深さ40cmで8号溝と交差するが、新旧関係はセクションから確認できなかった。7・8・9号溝が近接して存在し、溝の南端は土坑状になっている。

土師器埴及び甕が出土している(第8図1・2)。埴は口径12.3cm・器高18cmで、口縁部内外面ヘラミガキ、体部外面ヘラミガキ、内面はナデ及びハケ目を施す。甕は口径12cm・器高26.1cmで、口縁部・胴部内外面にハケを施し、胴部下半外面にはハケの上にヘラミガキを施している。

7号溝

8号溝に隣接する溝であるが、西側を攪乱に破壊されている。溝の方向から見て、5号溝に連続するものと考えられる。溝の東端は方形の深い土坑となっており、土坑より東には溝が続かない。内外面にヘラミガキを施した弥生の壺が出土している(第8図3)。

8号溝

6号溝にほぼ直行する位置関係に存在するが、6号溝より北東には続かず、南西側は攪乱に破壊されている。受部内外面及び脚部外面にヘラミガキを施し、脚部内面には横方向のヘラナデを施した土師器の器台が出土している(第8図4)。

9号溝

隣接する10号溝と共に細長い土坑であると考えられる。幅70cm・深さ65cm・長さ2.8mで、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。実測可能な遺物は出土していない。

10号溝

9号溝の東に隣接する溝である。幅60cm・深さ90cm・長さ4mで、南壁及び北壁に互い違いの配列で4基の土坑が掘られている。北西端の土坑は残存状態が良く、単純に上から穴を掘ったものではなく、天井を残して横に掘り広げる構造であることが判明した。この北西部分のみ土坑の底に大形の河原石が据えられていた。実測可能な土器類は出土していないが、寛永通宝が1枚検出された(第7図 図中)

11号溝

隣接する17号溝と規模・主軸方向をほぼ同じくする。10号溝と重複関係にあり、10号溝よりも古い。主軸方位は南北に近いが東方向へ少しずれている。幅90cm・深さ40cmで中央部分と南側は攪乱によって破壊されている。実測可能な遺物は出土していない。

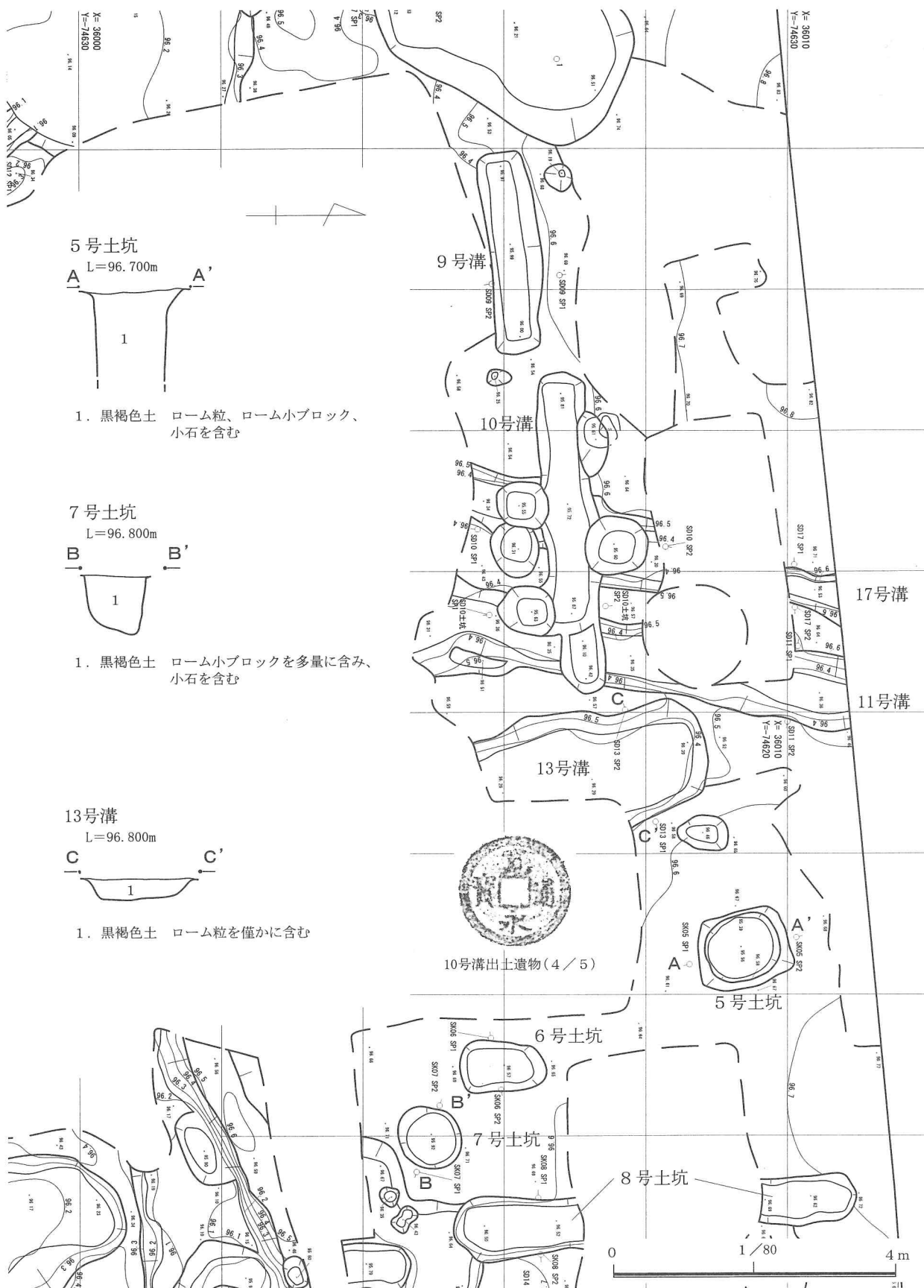
12号溝

4号土坑と重複関係にあり、4号土坑より古い。南東側を攪乱に破壊されている。主軸の方向は3号溝、6号溝に近い。実測可能な遺物は出土していない。

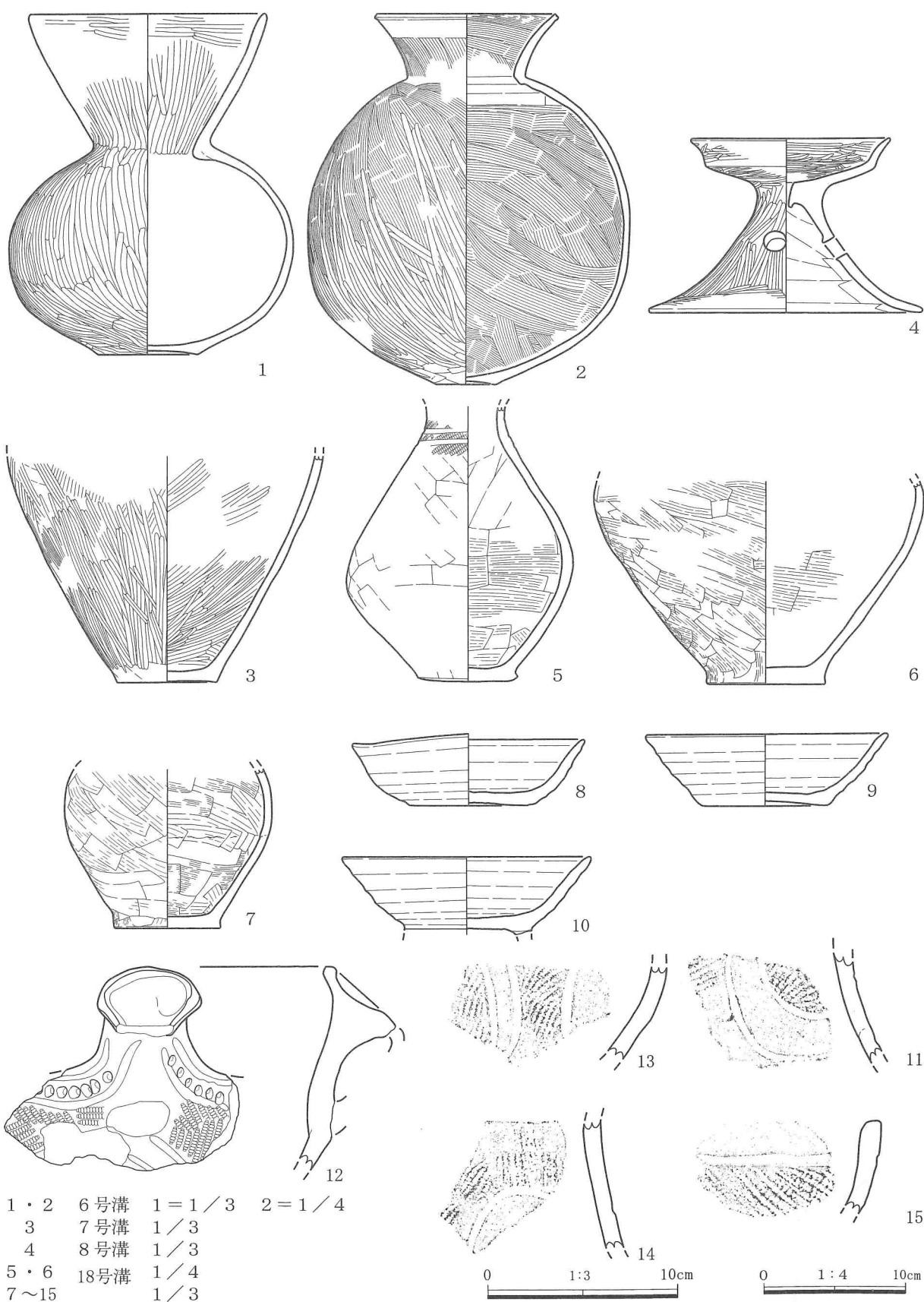
13号溝

10号溝、11号溝の東に隣接する溝で、これらに比べて溝幅が広いのが特徴である。主軸方位は南北から西の方向に少しずれており、東側で検出された8号土坑に近い。

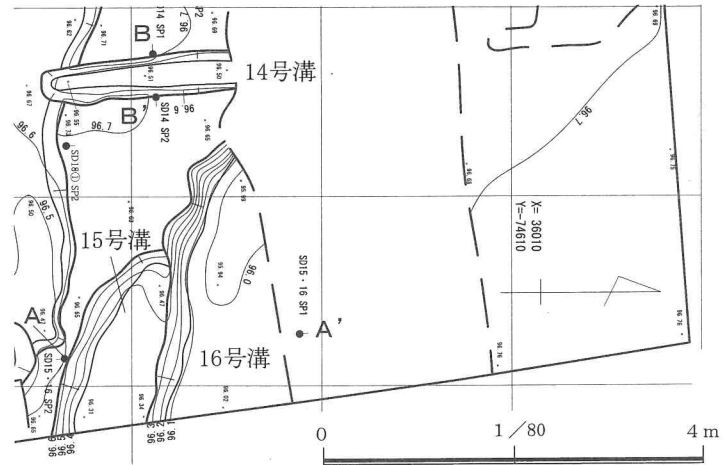
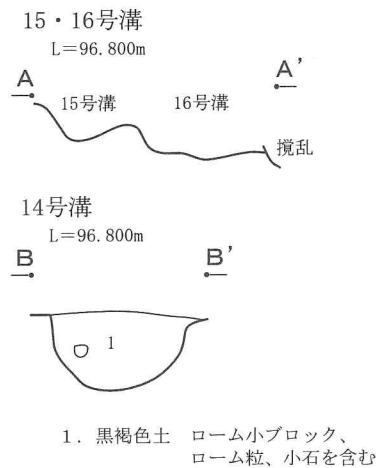
溝幅は150cm・深さは35cmで溝幅に比較して浅い構造である。北側の端部は側壁の立ち上がりと比較してかなり緩やかである。実測可能な遺物は出土していない。



第7図 9～11・13・17号溝 5～8号土坑



第8図 6・7・8・18号溝出土遺物



第9図 14・15・16号溝

14号溝

調査区北東端部に存在する、ほぼ南北方向に伸びる溝である。

溝幅35cmで深さ20cmと比較的浅い溝であり、北側が攪乱に破壊を受けている。攪乱の北側には溝の続きは確認できなかった。実測可能な遺物は出土していない。

15号溝

北側に隣接する16号溝と重複するが、東壁のセクションでは前後関係は認められない。東壁の西2m付近から南東方向へ伸びる。北壁は16号溝と重複しているため確認できない。

南に隣接する18号溝が15・16号溝とほぼ同じ規模を持ち、更にいくつかの溝が重なり合って一つの溝を形成していることから、15・16号溝も同じ機能を持った溝の複合遺構であるとかんがえられる。

確認できる溝幅は70～80cmで、深さは50cmである。実測可能な遺物は出土していない。

16号溝

15号溝と重複するが、東壁のセクションでは前後関係は認められない。北側は攪乱に破壊を受けており、東側は調査区外である。攪乱の北側には溝の続きは認められず、隣接する15号溝が東壁より2m付近から掘られていることを考えると、攪乱の中に北西の立ち上がりが存在するものと推定される。

溝幅は残存部分で140cmあり、攪乱部分の立ち上がりを加えると幅2m以上の溝になる。

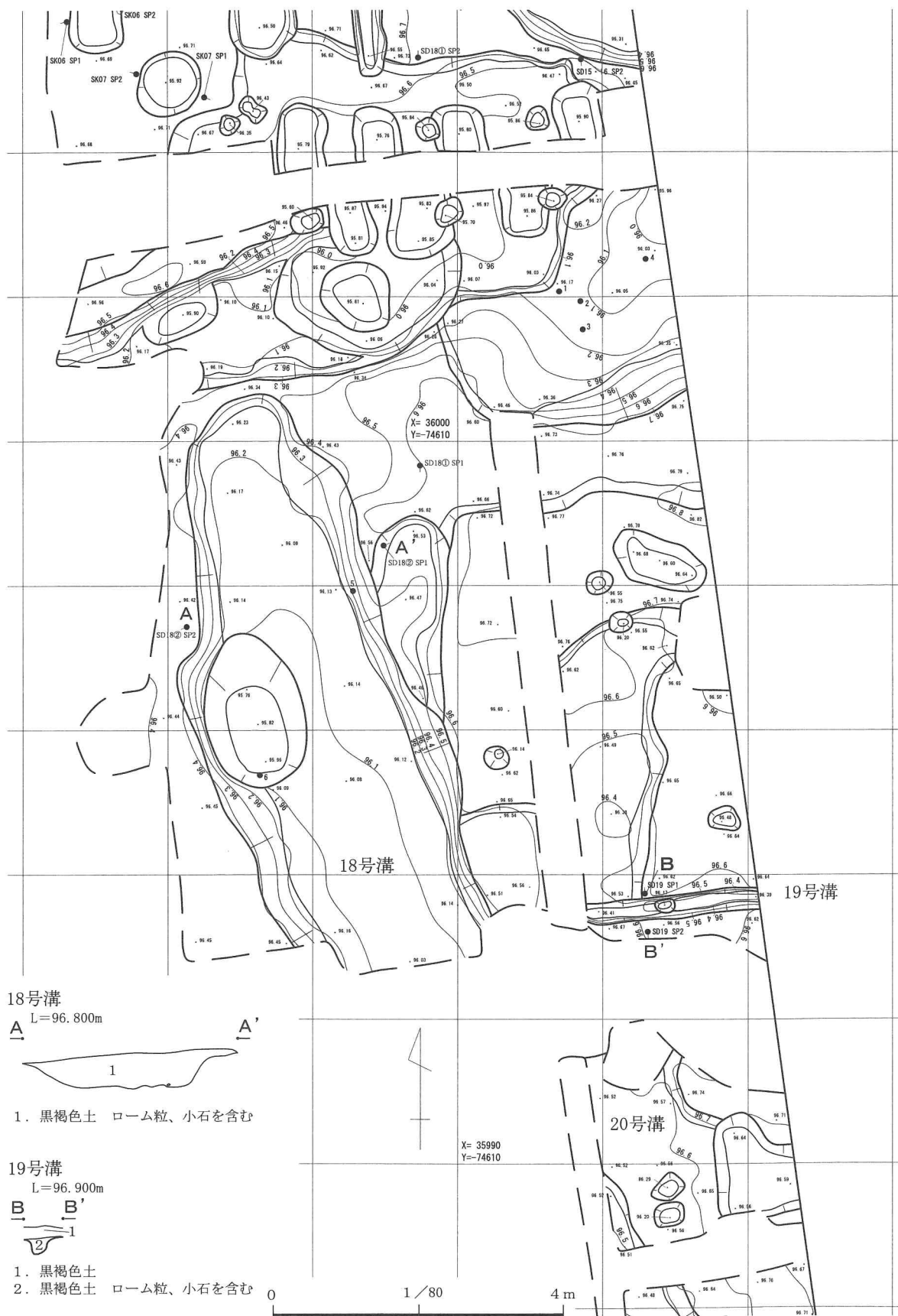
南に隣接する18号溝・20号溝がほぼ同じ規模であったことを考えると、これらは同じ機能を持った溝であると考えられる。

深さは70cmまで確認され、攪乱部分で更に深くなっている。実測可能な遺物は出土していない。

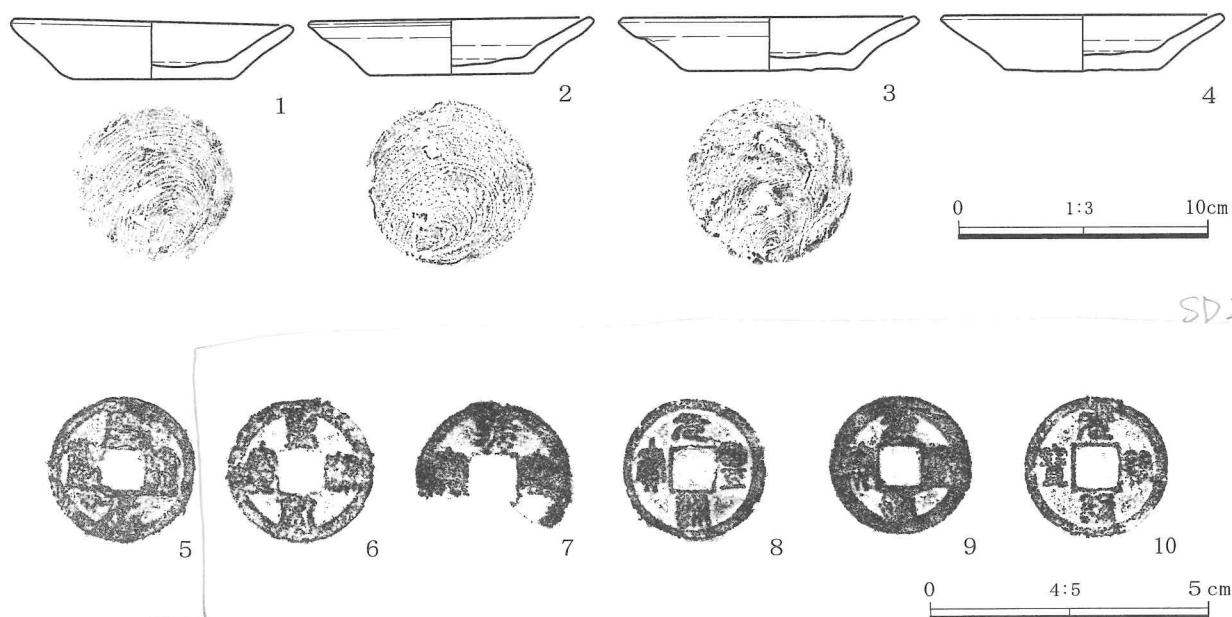
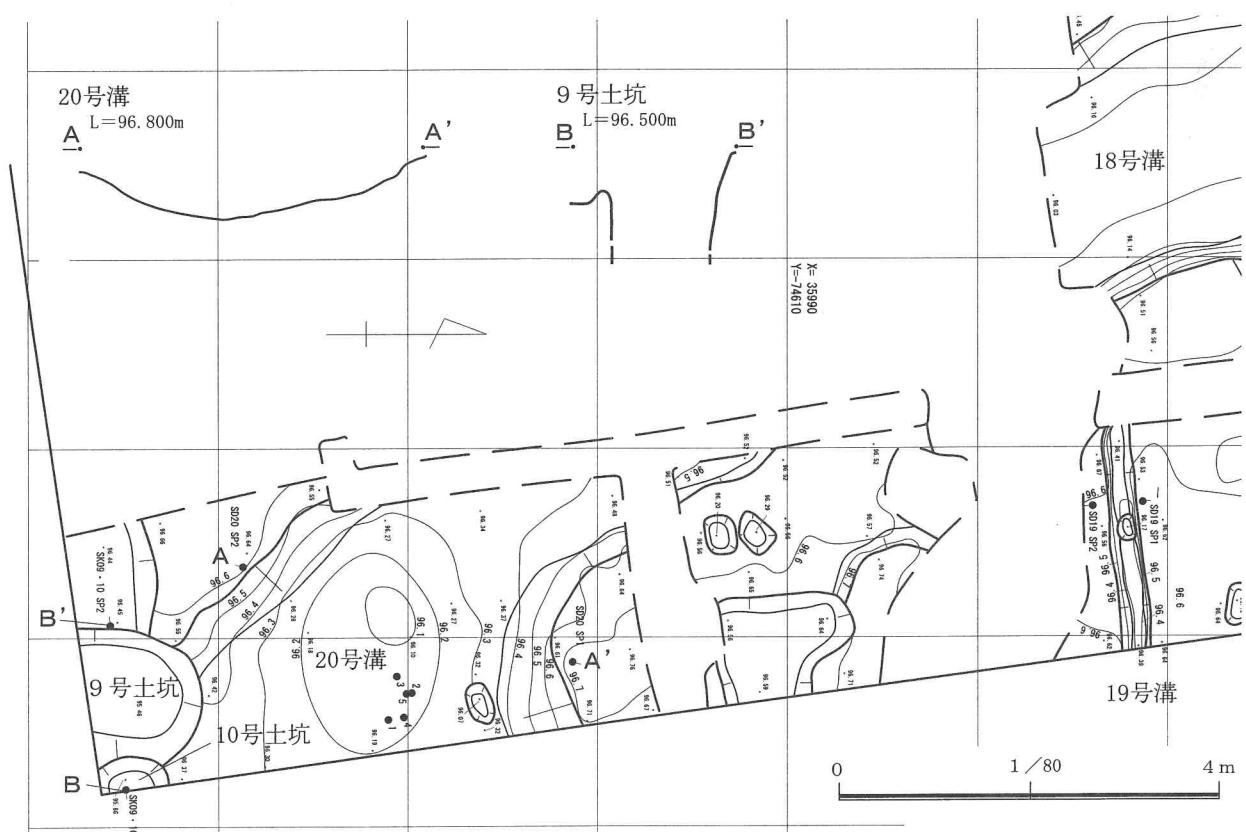
17号溝

11号溝の西に隣接し、同一方向に伸びる溝である。検出された中央部分は10号溝と重複しており、17号溝の方が古い、また10号溝の北側は攪乱によって破壊されている。

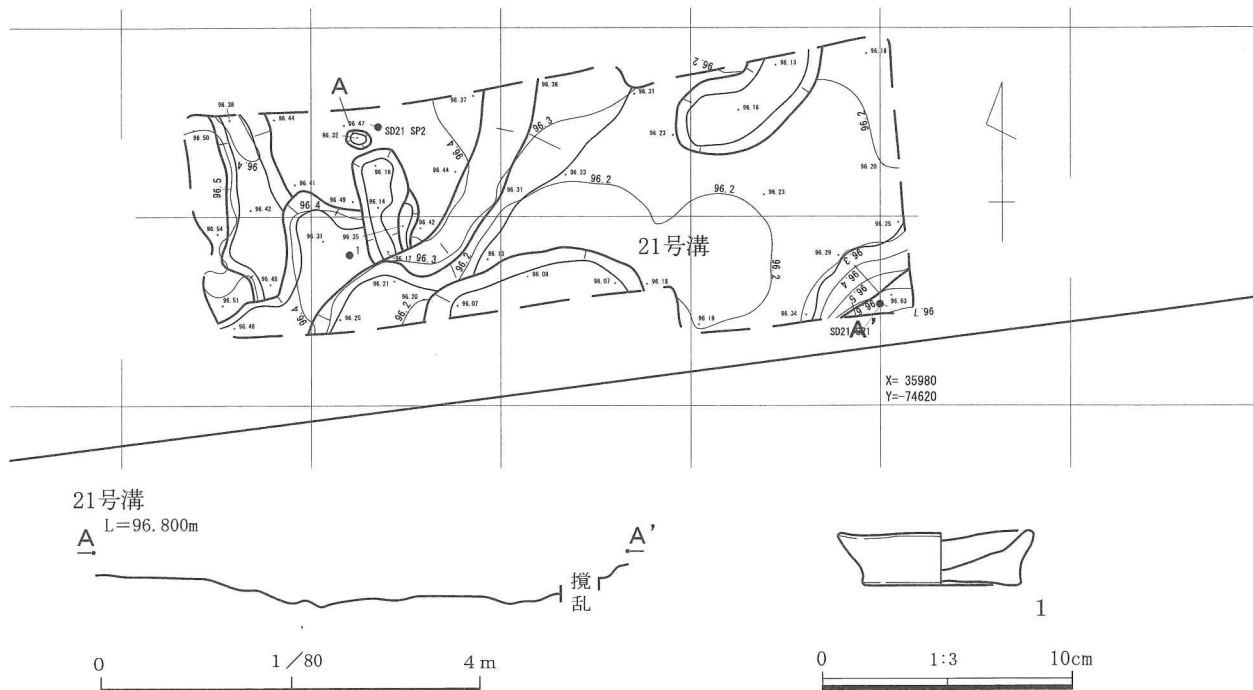
溝幅は50cm・深さは25cmで、11号溝よりやや小型で長さ5.4mが確認されている。実測可能な遺物は出土していない。



第10図 18・19号溝



第11図 20号溝 9・10号土坑 20号溝出土遺物



第12図 21号溝 21号溝出土遺物

18号溝

調査区東端中央に位置する溝で、いくつかの溝が合わさって一つの溝を形成している。

北端の14・16号溝南側には、南に落ちる浅い溝の掘り方が見られるが、東西方向に伸びる水路及びそれに付属する土坑群に破壊を受け全体像がはっきりしない。

東壁からは南西方向に伸びる溝が見られ、長さ3.6mでいったん立ち上がる。この溝の幅は2～2.5mで深さは70cm前後である。ここからは実測可能な土器が4個体出土している(第8図5～8 以下第8図を省略し、遺物番号のみで記載する)。5(平面第10図1 以下括弧内の数字のみで表現)は弥生時代の壺で残存高19.8cm、頸部に2本の沈線と斜方向の縄文を施す。体部内外面はヘラナデ調整である。6(2)は土師器の壺で平底の底部8.2cm・残存高14.5cmを計測する。内外面共にヘラナデ調整を施し、胎土には角閃石を含んでいる。7(3)は土師器の小形甕で底径5.6cm・残存高は8.4cmである。内外面にヘラナデを施している。8(4)は酸化炎焼成の須恵器杯で、口径12.0cm・底径6.2cm・器高3.8cmを計測する。低部は回転糸切り未調整である。

上記の溝が立ち上がる地点の北側に接して、同じ方向に伸びる溝が存在する。溝幅は2m・深さは20～40cmで、5.6mほど伸び、その先は攪乱で破壊を受けている。この地点から実測可能な土器は検出されていない。

これまで見てきた3溝は概ね東西方向に伸びる遺構であったが、これに直交するような形でもう1本の溝が存在する。この溝は幅2.4～3.2mで、深さは40cm前後である。この溝は南端が攪乱で破壊を受けているが、攪乱の先の20号溝は連続する同一の溝であると推定される。ここからは実測可能な遺物が2個体出土している。9(5)は酸化炎焼成の須恵器杯で、口径12.5cm・底径6.5cm・器高は3.8cmを計測する。低部は回転糸切り未調整で胎土に角閃石を含む。10(6)は還元炎焼成の須恵器碗で口径12.9cm・高台を含まない底径は6.6cm・残存高は3.9cmである。底部は回転糸切りの上に高台が貼り付けられている。

これらの溝を一つにするように東壁中央部分から西・南へL字状に包む溝の掘り方が見られる。溝群の最初に記載した14・16号溝南の掘り方は、この全体を取り囲む溝の北側の壁であるかもしれない。

また遺構全体からは縄文土器の破片が数点出土しているので併せて記載したい(第8図12～15)。

19号溝

18号溝の南端部分で東西方向に伸びる細い溝で、東端は東の調査区外まで伸びており、西は建物基礎のコンクリートで破壊を受けている。この攪乱は幅60cmであるが、この幅を境に溝は西側には続いていない。壁は直線状に立ち上がり、底はほぼ平坦である。溝幅は30cm・深さは20cmを計測する。実測可能な遺物は検出していない。

20号溝

調査区の南東端部に存在する溝で、東壁から北西に向かってL字状に曲がっている。北西に曲がった先端は攪乱に破壊されているが、その先は18号溝に連続するものと考えられる。溝幅は3.6m程で、深さは50cm前後である。調査区南東端部は井戸である9号土坑及び10号土坑と重複しており、20号溝の方が古い。

18号溝・20号溝の平面形態を見ると、調査区東端部をコの字状に囲んでおり、覆土の最下部に水が流れた痕跡は認められない。土地を大きく東西に区画する溝であろうか。

東壁際からカワラケ4個体と6枚の銭がまとめて出土している(第11図1～10)。出土状況から考えて、中・近世の墓であると考えられるが、墓の平面プラン及び土層の差異は認められなかった。

カワラケは以下の大きさである。1：口径11.0cm・底径6.3cm・器高2.4cm、2：口径11.1cm・底径6.5cm・器高2.3cm、3：口径11.5cm・底径6.5cm・器高2.2cm、4：口径11.0cm・底径6.0cm・器高2.3cm。口径・器高共に形の揃ったものを選択していることがわかる。銭は5開元通寶、6皇宋通寶、7熙寧通寶、8元豊通寶、9元豊通寶、10元祐通寶である。

21号溝

調査区南西端で検出された溝である。北・東・南を攪乱で破壊されているため、平面プランは明瞭ではないが、概ね北東から南西に伸びる溝である。溝幅は4m前後で深さは40cmである。溝上部が削平されているため多少浅くなっているが、18・20号溝と同様の機能を持った溝であると推定される。

実測可能な遺物はカワラケが1点出土している(第12図1)。口径7.7cm・底径6.0cm・器高2.2cmのやや小形で口縁部の立ち上がりが短い形態である。

②土坑

1区から検出された土坑は、大型で覆土中に石垣の石を含むもの(1号土坑)や井戸(5号土坑・9号土坑)の他は機能不明の小土坑が多く、実測可能な遺物の出土も少ない。

1号土坑

調査区北西端部で確認された土坑で、方形のプランを持つ。南半を攪乱によって破壊されているため、全容は明らかではないが、東に向かって2段に落ちる。上段の東西幅は3m・下段は4.2mと大きく、深さは検出面より約1mである。覆土中に石垣に使用したと考えられる10～50cm大の円礫と、裏込めに使用した拳大の石が多数見られる。実測可能な遺物は無いが、陶磁器片・瓦片が見られた。

2号土坑

1号土坑の東に接する土坑である。径2m・深さ20cmの土坑で、遺物は見られない。

3号土坑

4号溝の東に接する隅丸方形の土坑である、東西2.1m・南北1.7mで東西にやや長い形状で、深さは40～50cmである。床面は平坦ではなく、中央部に小土坑が存在する。実測可能な遺物は出土していない。

4号土坑

7号溝の南、12号溝の北側に存在する径4.5mの円形土坑である。東側・西側を攪乱に破壊されているため、全体像は明確ではない。12号溝と重複し、4号土坑の方が新しい。
土師器の器台が出土している(第13図1)。口径8.6cm・底径11.2cm・器高7.6cmで、外面にヘラミガキが施されている。内面の調整は器面が荒れているため不明瞭である。

5号土坑

13号溝の東に存在する井戸である。南北120cm・東西100cmの方形の掘り方の内側に、径100cmの円形・垂直の掘り方を持つ。1.4mほど掘り下げた地点から湧水が開始した。実測可能な遺物は出土していない。

6号土坑

5号土坑の南東に見られるやや崩れた隅丸方形の土坑である。東西65cm・南北100cmで、深さは10cmである。実測可能な遺物は出土していない。

7号土坑

6号土坑の南東に見られる円形土坑である。径80cm・深さ60～85cmで、床は西に向かって深くなっている。実測可能な遺物は出土していない。

8号土坑

7号土坑の東に見られる溝状の土坑である。幅80cm・深さ20cmを計測し、中央部分を攪乱に破壊されるが長さは5.8mである。南端が18号溝の北壁と重複するが、覆土から見た新旧関係は不明である。
実測可能な遺物は出土していない。

9号土坑

20号溝の南端に接し、20号溝より新しい井戸である。径1.8mの円形掘り方で、5号土坑に見られたような方形の区画は検出されない。
実測可能な遺物は出土していない。

10号土坑

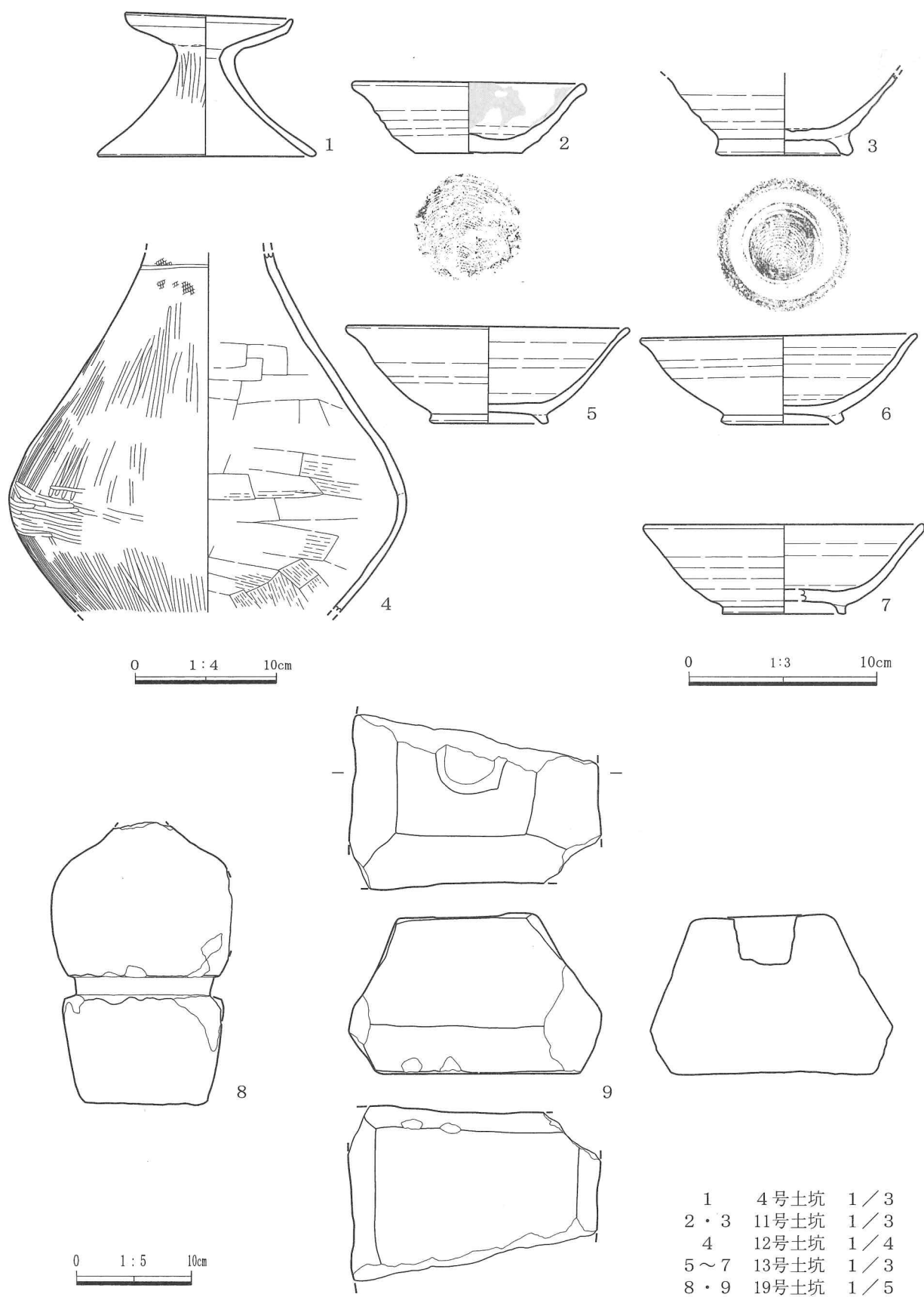
9号土坑の東に接する径80cmの円形土坑で、深さは20cmである。南壁の観察では9号土坑との新旧関係は確認できなかった。
実測可能な遺物は出土していない。



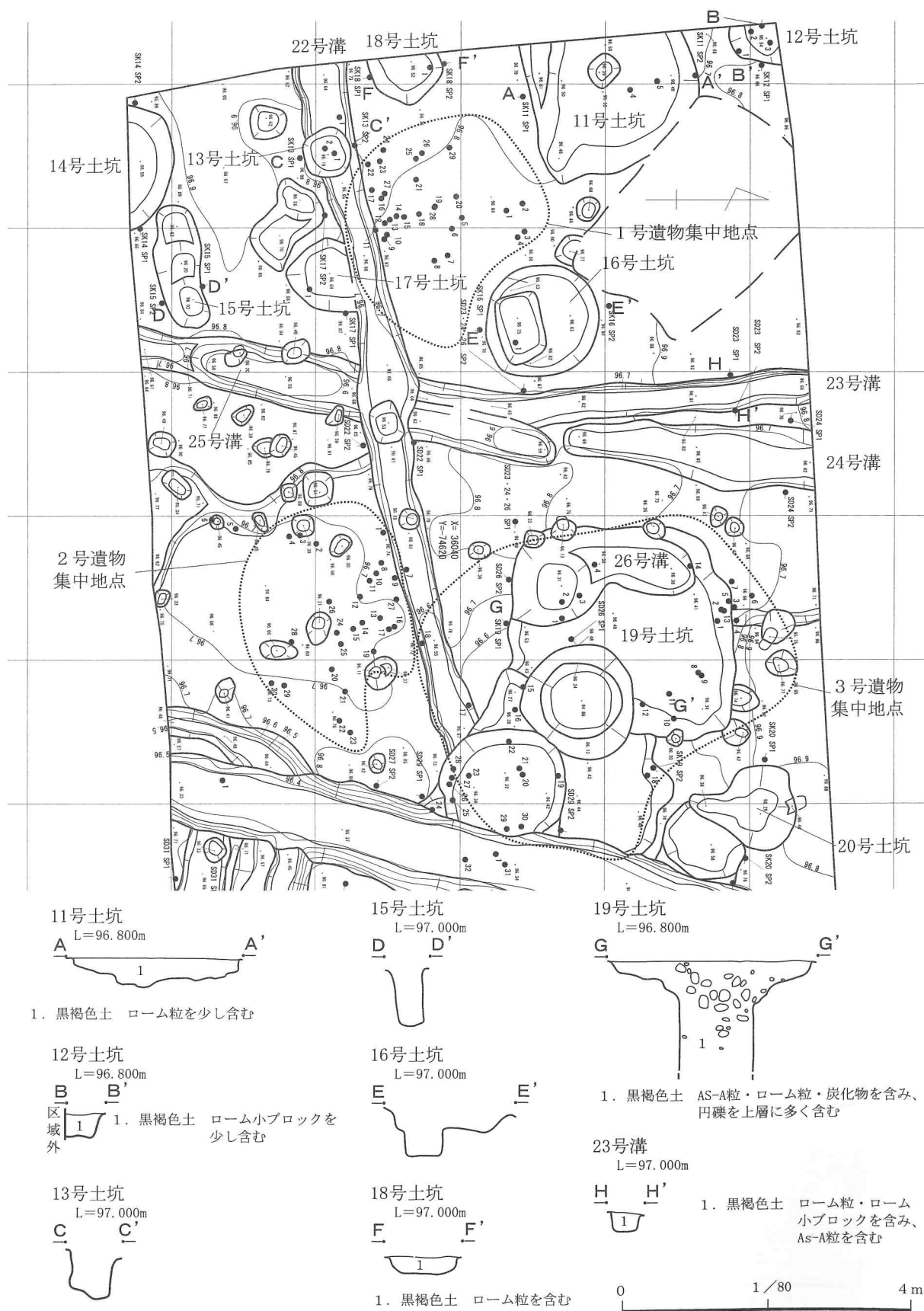
1号土坑調査風景



18号溝調査風景



第13図 4・11~13・19号土坑出土遺物



第14図 11~20号土坑 22~26号溝

3-3 2区の遺構

2区は北側の調査区で、駐車場として利用されていた部分である。現在使用中の高圧線及びガス管が南北に存在するため掘削可能な区域が限定されているが、1区のようにビル等が建築されていなかったため、遺構の残存状況は良好である。

検出された遺構は溝と土坑が中心で、土坑の中には井戸が含まれている(19号土坑)。溝には東西方向の細い溝と南北方向の細い溝があり、東端部で確認された3条の溝は、東西から南北へL字状に方向を変えている(27・28・31号溝)。

また住居等の遺構は検出されなかったが、平安時代の土器類及び弥生中期の土器類が集中して検出された地点が3か所存在した(1～3号遺物集中地点)。

これらの地点の遺物は他所から流れてきた痕跡は見られず完形品が多いが、住居や土坑の平面プランや柱穴・焼土を確認することができなかった。従ってこの遺構を住居跡との認識はせずに遺物集中地点として扱っている。しかし1区の20号溝中に平面プランが確認できない墓(カワラケ・銭が出土)が存在したこともあるので注意が必要である。

①溝

2区で検出された溝は、調査区を東西方向に貫くもの(22号溝)が1条ある他は、ほぼ南北方向の溝が多い。

調査区東端の27・28・31号溝は、区東壁から6m程度西方向に伸びた後、南へ方向を変えている。

溝からの遺物は実測可能なものが少なく、小片が多い。27号溝からは「首」の墨書を持つ陶器碗が出土している。

22号溝

調査区の西壁から東壁に向かってやや北向きに東西方向に伸びる溝である。溝幅は45～50cm・深さは20cm前後と小形であるが、コの字型に掘られている。23・25号溝・19号土坑・27号溝と重複するが、覆土から新旧関係を認識できなかった。実測可能な遺物としては、滑石製の白玉が出土している(第18図11)。

23号溝

調査区北壁中央やや西寄りから南に向かって伸びる溝で、南端は25号溝と重複するが新旧関係は認識できない。溝幅は40cm前後で深さは20cmである。主軸の傾きを見ると、24・25号溝はほぼ同じ方向に伸びているが、23号溝は異なっており、東西方向に伸びる22号溝と直交している。溝の形態も直線的な壁でコの字形に掘り込まれており、22号溝に近い。

遺物は小片が多く、実測できる個体は出土していない。

24号溝

23号溝の東に沿うような形で存在する溝で、調査区北壁から3.4mの地点で南側の立ち上がりが存在し、主軸方位は25号溝とほぼ一致している。

溝幅は40cmから95cmで、北へ向かいやや広めになっている。深さは20cmで、壁の立ち上がりは23溝などと比べて緩やかである。

5mほど東に存在する27号溝の南北方向に伸びている部分とほぼ並行しており、28・31号溝の東西方向に伸びている部分とは直行する関係にある。

従って、24・25号溝及び27・28・31号溝は、同一の主軸方位を持つ建物を分割した溝である可能性が高い。

実測可能な遺物は出土していない。

25号溝

24号溝の南側立ち上がりの南に接して存在する溝で、24号溝に連続する同一の機能を持つ溝であると推定される。溝幅60cm・深さは30cmで、部分的に深くなっており溝底は安定していない。24・27・28・30号溝と同一区画を形成しているものと考えられる。

実測可能な遺物は出土していない。

26号溝

19号土坑の中に存在し、土坑の一部である可能性が高い。溝幅は80cmで深さ34cm、南端が土坑状に掘られている。

陶磁器等の遺物が出土しているが、小片であるため実測はできない。

27号溝

調査区北東端部から南に伸びた溝が西へ曲がり、更に南に曲がって調査区外に抜けている。幅1.2m・深さ60cm前後で、覆土にAs-A粒を含む。南に並ぶ28・31号溝及び24・25号溝と同一区画を形成している。

遺物は溝底から陶器碗(第18図12)が出土しているが、溝の最上層から3号遺物集中地点の遺物が2点出土している。3号遺物集中地点の遺物のあり方を考える上で、重要な遺構である。

28号溝

27号溝から6.4m南で東壁から7m西に伸び、L字状に曲がって南に折れる溝である。溝幅1.2m・深さ15cmを計測し、As-A粒を覆土とする。区画溝の掘り方を再利用し、As-Aの処理溝として利用したものであろう。

27号溝と同じ主軸方位でL字に折れる形態も同一であることから、隣接する31号溝と共に同一機能を持つ溝であると考えられる。27号溝と重複関係にあり、覆土(As-A)の入り方を見る限りでは28号溝の方が新しい。遺物は全く出土しなかった。

29号溝

19号土坑から東に伸びる溝である。当初溝として確認していたのであるが、構造から見て東西方向にやや長い土坑であると考えられる。幅1.6m・深さ20cm前後で床面にはかなり凹凸がある。

遺物は覆土の上位にのみ存在し、平安時代のものばかりである。3号遺物集中地点の遺物であると考えられる。

30号溝

調査区東端を南北に伸びる浅い溝である。溝幅は78cmで南側が広くなり1.4mを計測する。

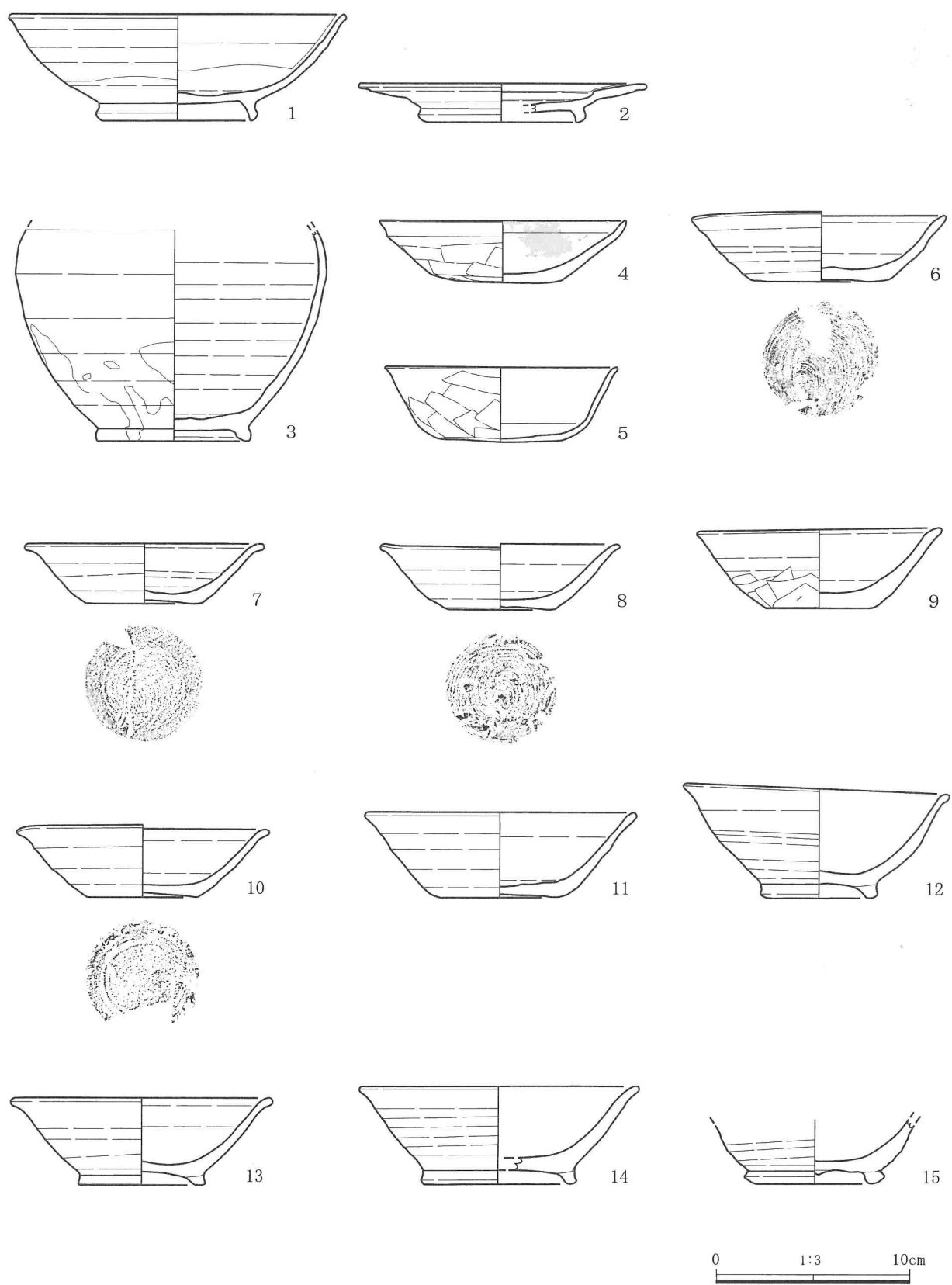
遺物は土師器高杯の一部(第18図13)が出土しているが、遺構の年代を決定するものではない。

31号溝

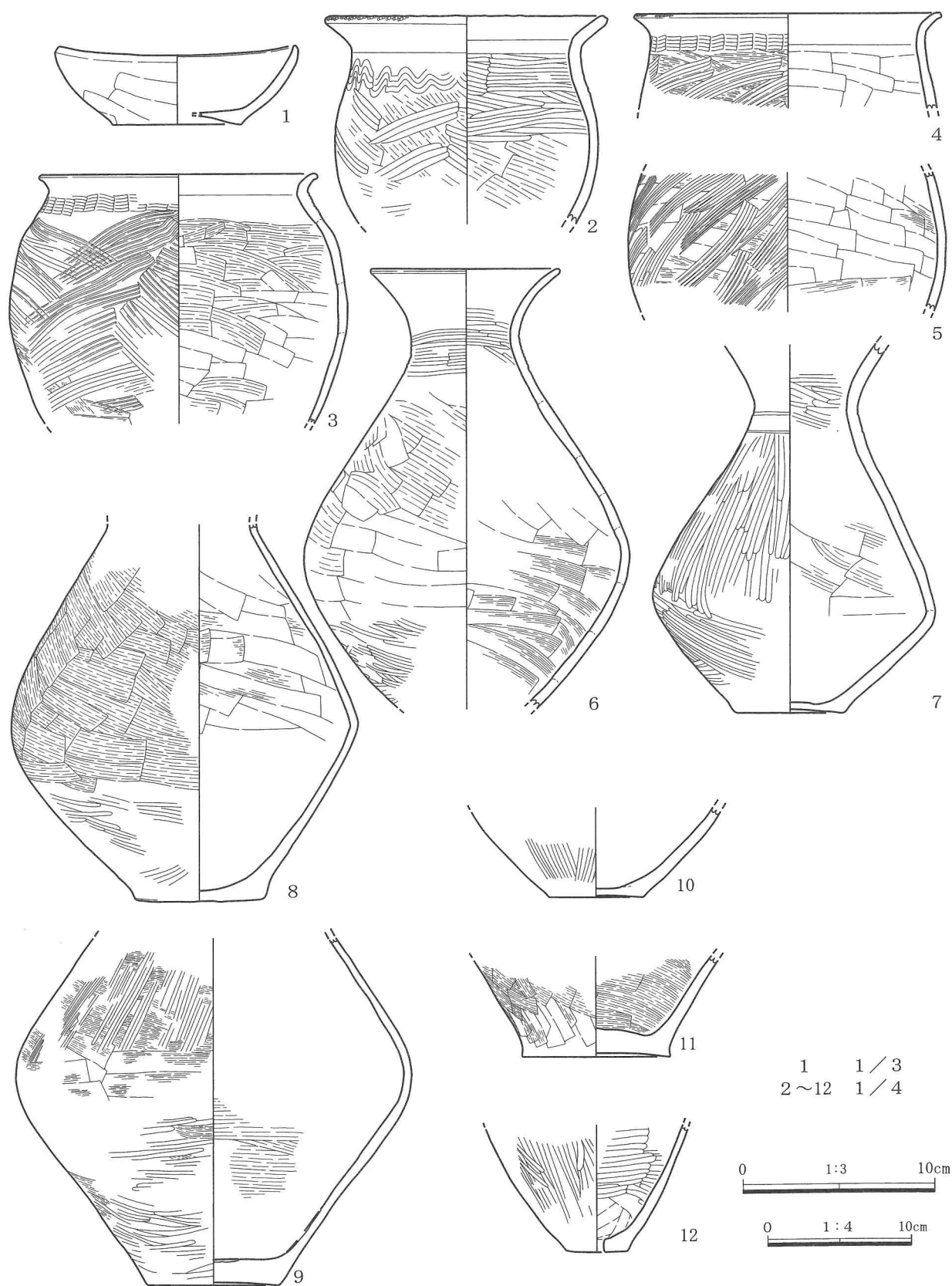
28号溝の南に並列する浅い溝である。溝幅は70cm前後で、深さは10cmを計測する。28号溝と同じ主軸方位であるが、27号溝及び28号溝の南へ折れる部分と交錯しており、31号溝も南に折れる構造であったかどうかは確認できなかった。

28号溝のように覆土の大部分がAs-A粒であるわけではないが、黒褐色土をベースに大量のAs-A粒を含んでいる。従って火山灰の処理坑とはいいがたいが、28号溝と極めて近い時期の遺構であると推定される。

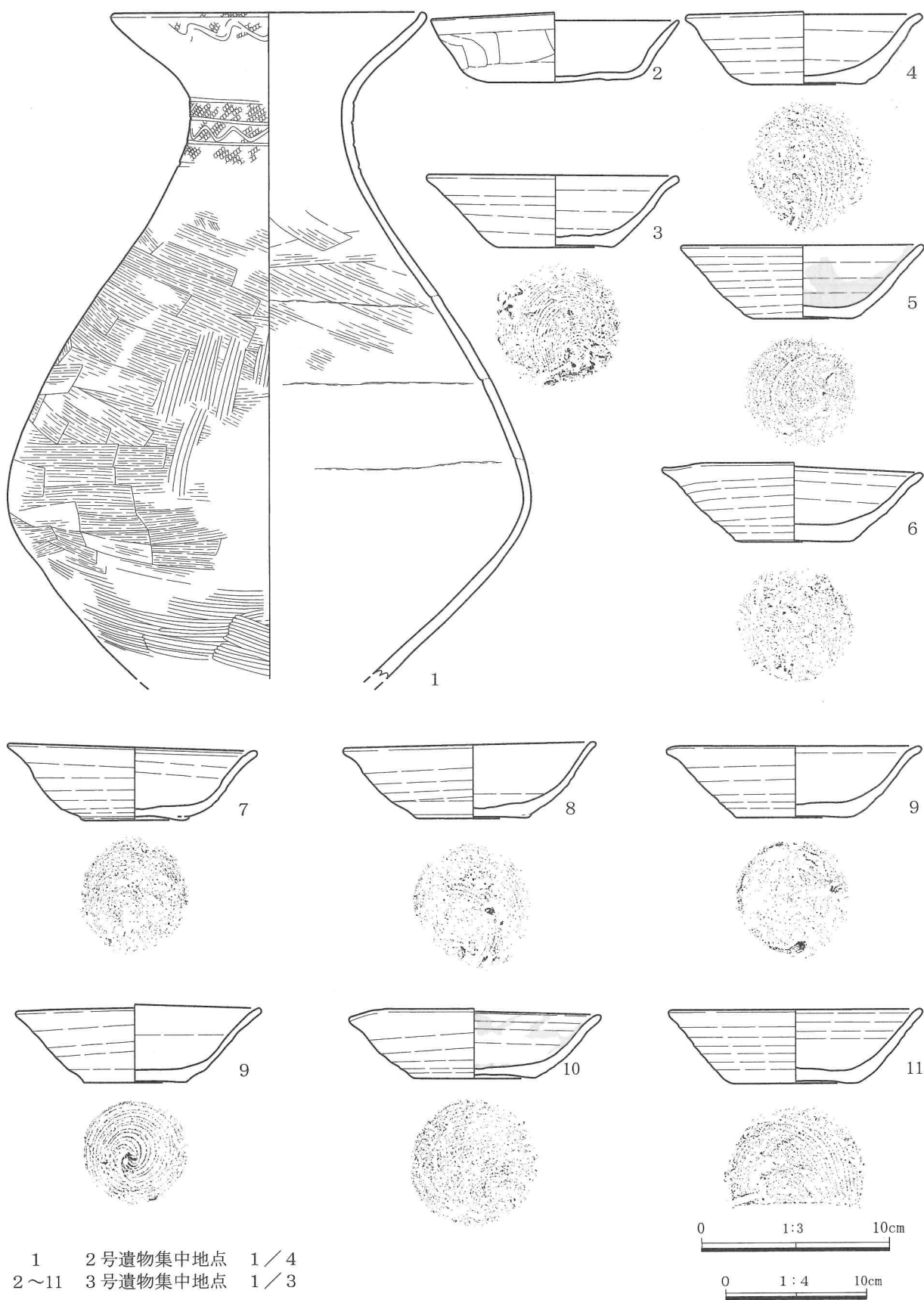
実測可能な遺物は出土していない。



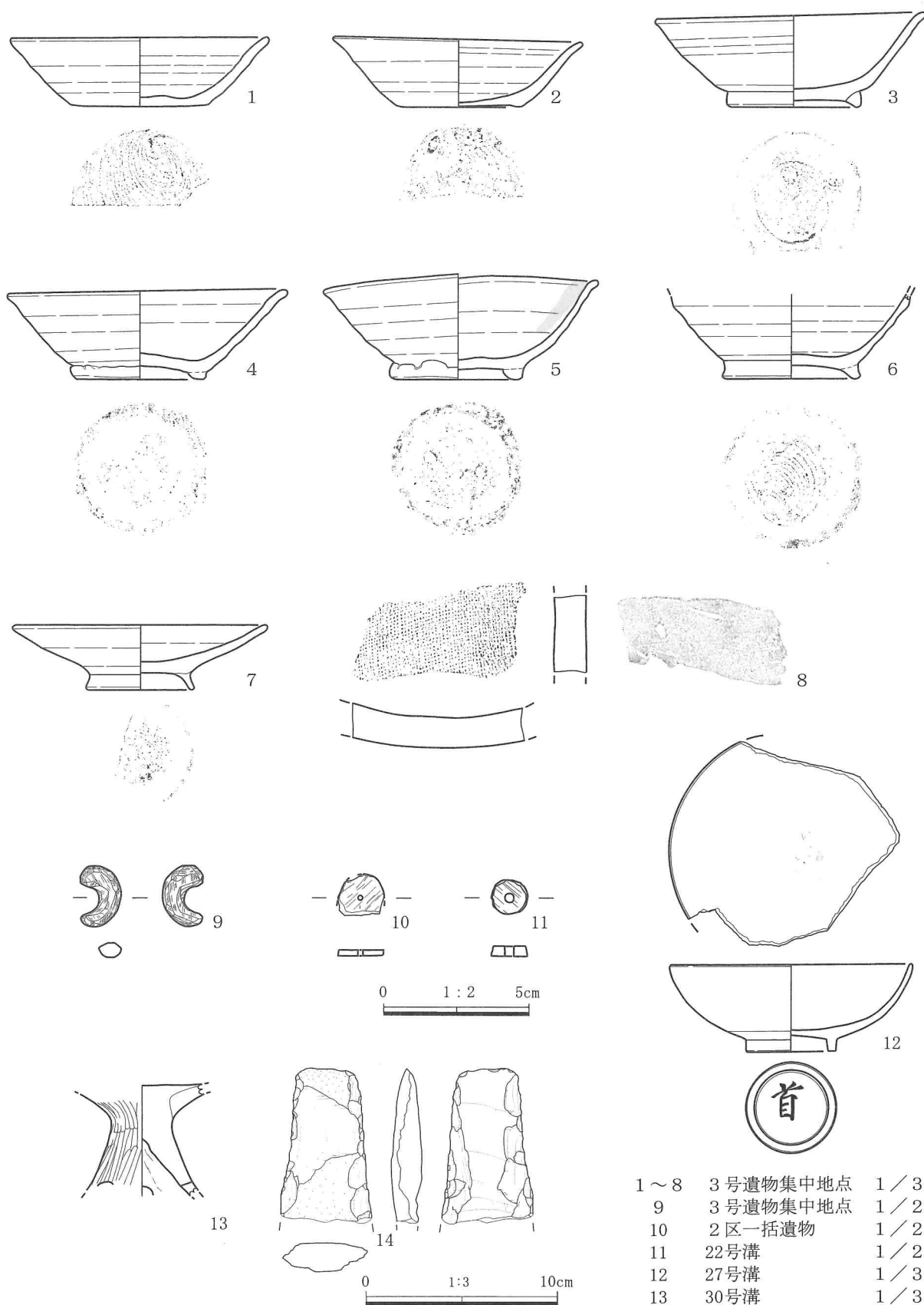
第15図 1号遺物集中地点出土遺物



第16図 2号遺物集中地点出土遺物(1)

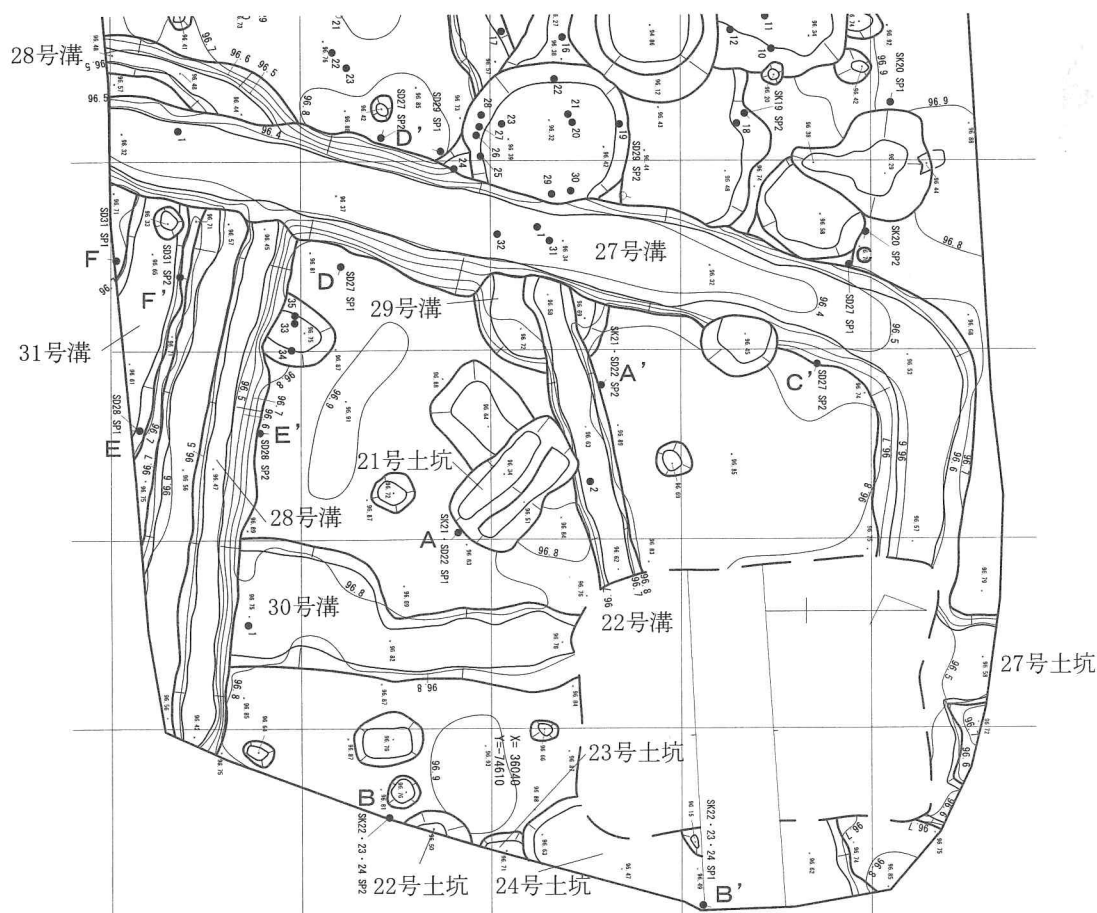


第17図 2号遺物集中地点出土遺物(2) 3号遺物集中地点出土遺物(1)

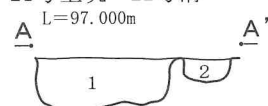


- | | | |
|-------|----------|-------|
| 1 ~ 8 | 3号遺物集中地点 | 1 / 3 |
| 9 | 3号遺物集中地点 | 1 / 2 |
| 10 | 2区一括遺物 | 1 / 2 |
| 11 | 22号溝 | 1 / 2 |
| 12 | 27号溝 | 1 / 3 |
| 13 | 30号溝 | 1 / 3 |
| 14 | 1区一括遺物 | 1 / 3 |

第18図 3号遺物集中地点出土遺物(2)

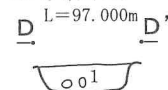


21号土坑・22号溝



1. 黒褐色土 ローム粒をやや多く含む、小礫を含む(21号土坑)
2. 黒褐色土 ローム粒、AS-A粒を少し含む(22号溝)

27号溝(2)



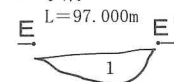
1. 黒褐色土 AS-A粒、ローム粒を含む

22・23・24号土坑



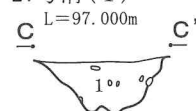
1. 黒褐色土 ローム粒、AS-A粒を少し含む(22号土坑)
2. 黒褐色土 ローム粒を含む(23号土坑)
3. 黒褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを少し含む(24号土坑)

28号溝



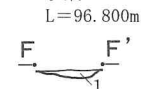
1. AS-Aを主体とする層

27号溝(1)

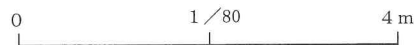


1. 黒褐色土 ローム粒、AS-A粒をわずかに含む

31号溝



1. 黒褐色土 AS-A粒を多量に含む



第19図 22・27～31号溝 21～24号土坑

②土坑その他

2区の土坑で特徴的なのは、底から平安時代の杯が3個体出土した13号土坑及び井戸を中心に崩れた隅丸方形状に広がる19号土坑である。19号土坑は近世以降ものと推定される。

また3か所の遺物集中地点があり、住居跡等の遺構の有無が問題になってくる。

11号土坑

12号土坑の南に存在する径4.2mの円形土坑で、深さは42cmを計測する。平安時代の杯・碗が出土している(第13図2・3)が、1号遺物集中地点からの流れ込みである可能性も考えられる。2の杯は口径12.0cm・器高3.8cmの還元炎焼成で、内面にススが付着している。

12号土坑

調査区北西端で検出された土坑で、弥生時代中期の壺が出土した(第13図4)。4は底部及び口縁部が失われており、頸部に縄文及び沈線を施している。胴部外面はハケメ後ヘラミガキ調整である。残存高は25.5cmである。

13号土坑

調査区西端中央に存在する円形土坑で、22号溝と重複関係にあり。22号溝より古い。土坑の径は64cm・深さは80cmを計測する。高台付の杯が3個体出土しており(第13図5～7)、土坑の底から出土した1・2はほぼ完形品である。

14号土坑

調査区南西端で検出された土坑で南半分は調査区外である。径は1.65m・深さは38cmを計測する。覆土にAs-A粒を含んでいる。実測可能な土器は出土していない。

15号土坑

14号土坑の東に存在する土坑である。長軸1.6mで、北東へ向かって3段に下がっている。深さは最も深い東端部で78cmを計測する。実測可能な遺物は出土していない。

16号土坑

23号溝の西に存在する円形土坑で、南側が隅丸方形にくぼんでいる。径1.6mで深さは北側で24cm、南側で62cmを計測する。実測可能な遺物は出土していない。

17号土坑

22号溝の南に存在する土坑で、径は1m前後・深さ24cmである。実測可能な遺物は出土していない。

18号土坑

調査区西端に存在する円形土坑で、径94cm・深さ26cmである。実測可能な遺物は出土していない。

19号土坑

井戸を中心にやや崩れた隅丸方形を呈する土坑である。周囲にピット群が存在し、井戸の覆い屋であったことも考えられる。井戸内からは、多数の円礫と陶磁器小片及び石製空風輪・火輪が出土している(第13図8・9)。井戸の覆土の上層のみから円礫が検出されていることから、井戸の灰絶後に大部分が埋め戻され、穴として残っ

ていた上部に石垣などの石材を投棄したものと推定される。

20号土坑

19号土坑の東側に存在する土坑で、円形の部分と溝状の部分がある。円形部分の径は126cm・深さは62cmである。実測可能な遺物は出土していない。

21号土坑

27号溝の東に存在する土坑で溝状に2段掘られている。22号溝と重複し、21号土坑の方が新しい。全体的には幅82cm・長さ1.46mで、深さは56cmを計測する。実測可能な遺物は出土していない。

22号土坑

調査区東端に存在する土坑で、径76cm・深さは38cmである。実測可能な遺物は出土していない。

23号土坑

22号土坑の北に接する土坑である。残存部分の径42cm・深さ20cmである。実測可能な遺物は出土していない。

24号土坑

23号土坑の北に並ぶ土坑である壁の立ち上がりは22・23号土坑と比較して緩やかである。

1号遺物集中地点

調査区東側の11号土坑・17号土坑間で平安時代の遺物が集中して検出された(第15図)。土器類と共にカマド材と考えられる焼けた石が数点見られたが、周辺から焼土が検出されず、床・柱穴その他も確認できなかった。11号・13号土坑内の杯類も同一時期のものと推定される。特に13号土坑は当該期の遺構である可能性が高い。

2号遺物集中地点

22号溝と25号溝にはさまれた地点で弥生中期の土器群が検出された(第16図・第17図1)。1号遺物集中地点と同様住居の平面プラン・焼土・柱穴等は確認できなかった。12号土坑と共に、弥生時代の遺構が存在した可能性は高い。

3号遺物集中地点

19号土坑周辺で検出された、平安時代の土器群である(第17図2～11・第18図1～9)。遺物の一部は19号土坑上層、27号溝上層にも混入しているが、完形品が多い。

3-4 調査のまとめ

1・2区共に近世の遺物が想像以上に少なかったことが特徴的である。陶磁器類や瓦は実測可能なものは数点に過ぎず、ほとんどが実測不可能な小片となっていた。

それに比較して古い遺物が多く出土したことも特徴的である。18号溝から出土した縄文土器や1区一括遺物の打製石斧(第18図14)をはじめとして、2号遺物集中地点・12号土坑の弥生土器、1・3号遺物集中地点の平安時代土器など古代以前の良好な土器資料が検出された。

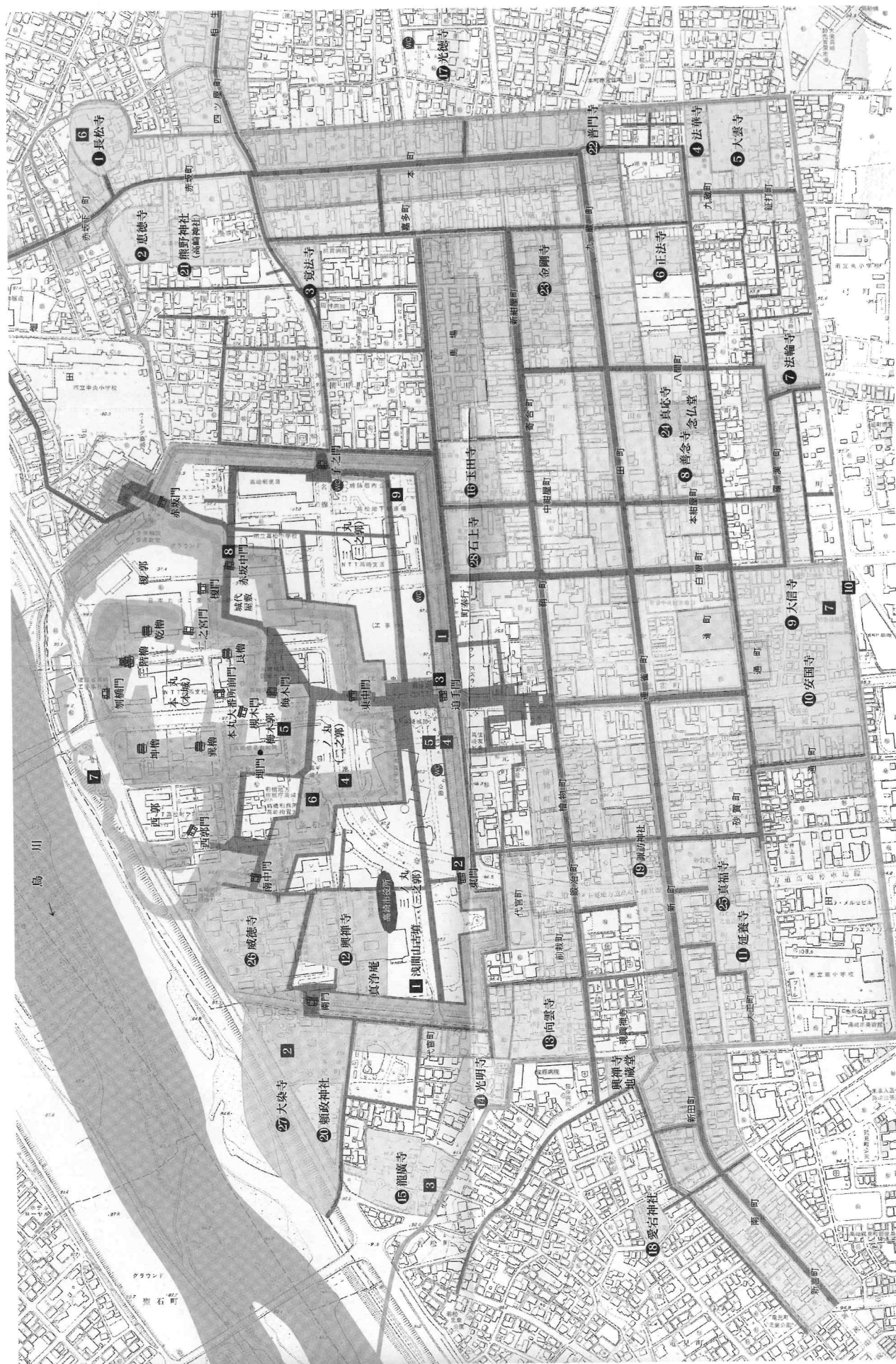
残念ながら堅穴住居跡などは確認されず、課題を残す結果となったが、今後周辺地域の詳細な調査を進めていけば、平安時代以前の遺構資料が発見されるもとと考えられる。

報告書抄録

フリガナ	タカサキジョウジュウナナイセキ
書名	高崎城Ⅷ遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第206集
編・著者名	黒田 晃
編集機関	高崎市教育委員会
編集機関所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1
発行年月日	2006年3月31日
発行機関	高崎市教育委員会

フリガナ	タカサキジョウジュウナナイセキ				
所収遺跡名	高崎城Ⅷ遺跡				
フリガナ	ゲンマケンタカサキンタカマツチョウ				
所収遺跡所在地	群馬県高崎市高松町36				
市町村コード	遺跡番号	調査開始	調査終了	調査面積	調査原因
10202	390	17年7月11日	17年10月25日	3,000㎡	国立高崎病院新病棟建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高崎城Ⅷ遺跡	包蔵地	縄文時代		土器・石器	
		弥生時代	遺物集中地点	土器	中期の土器群
		平安時代	遺物集中地点	土器	杯等の土器群
	墓域	中世	墓	カワラケ・銭	
	城郭	近世	溝・井戸	陶磁器・五輪塔	土地区画の溝



現在の地図と高崎城絵図 『高崎城下町探訪 -歴史と文化財-』 より



1区全景



1区調査風景



1号土坑



1号土坑



3号土坑



2・3・4号溝



3号土坑・4・5号溝



5号溝



6・7・8号溝



6・7・8号溝



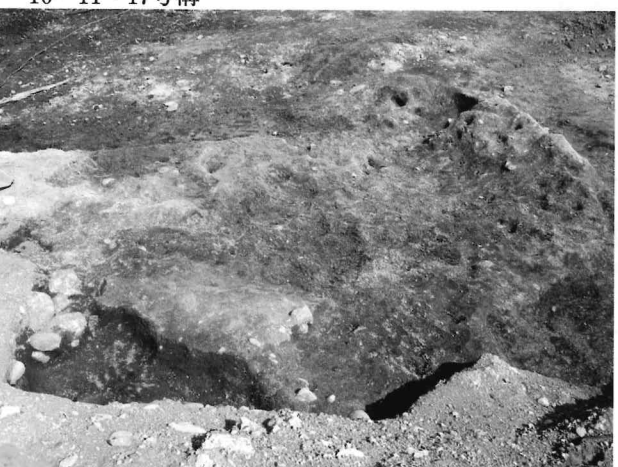
10号溝断面



10・11・17号溝



13号溝



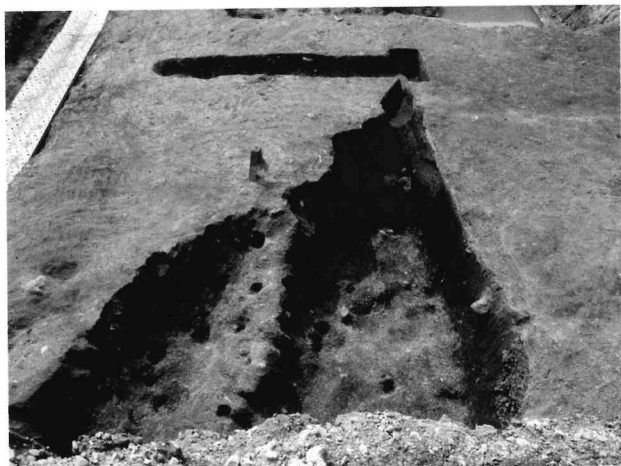
4号土坑・12号溝



5号土坑



7号土坑



15・16号溝



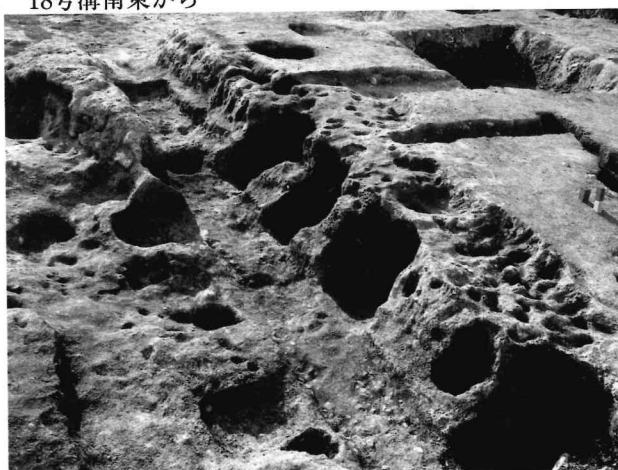
18号溝北側部分



18号溝南東から



18号溝セクション



18号溝東から



18号溝南から



18号溝調査風景



6号土坑



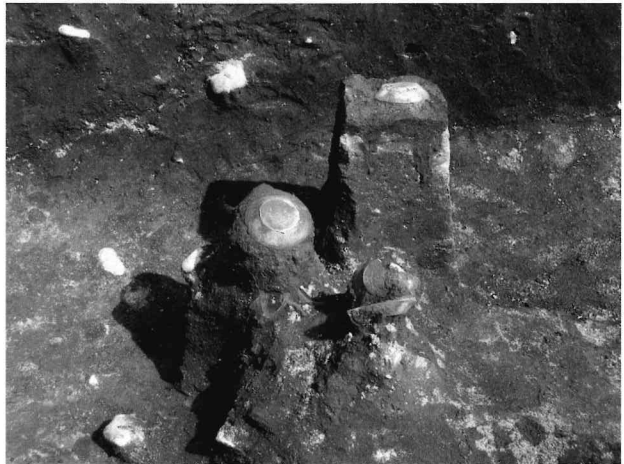
20号溝北東から



20号溝西から



20号溝調査風景



20号溝東端近世墓副葬品



20号溝東端近世墓副葬品



20号溝南東端9・10号土坑



9・10号土坑断面



21号溝



2区全景東から



2区西半部



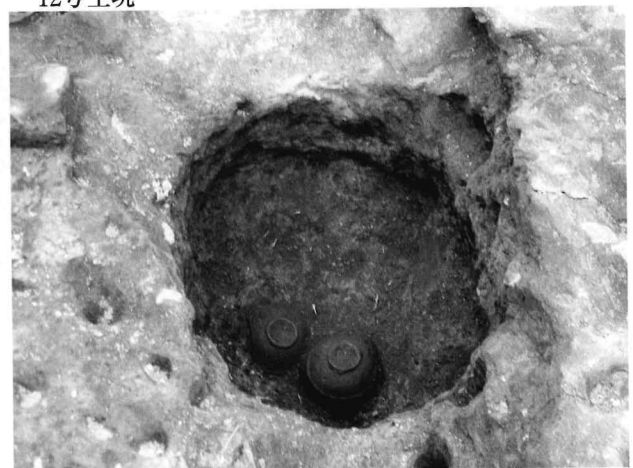
11号土坑



12号土坑



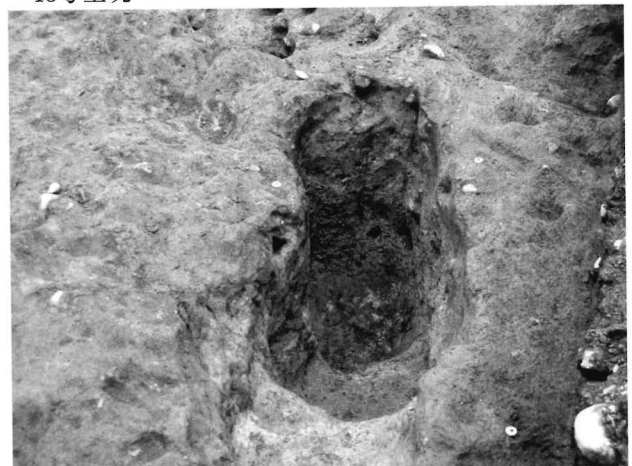
12号土坑遺物出土状況



13号土坑



13号土坑遺物出土状況



15号土坑



22・27号溝を中心とした2区東部



27号溝



28号溝As-A軽石



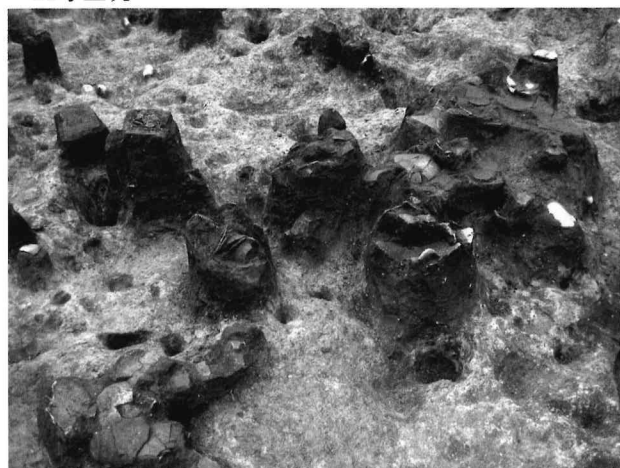
19号土坑



21号土坑



1号遺物集中地点



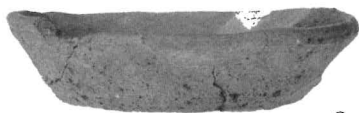
2号遺物集中地点



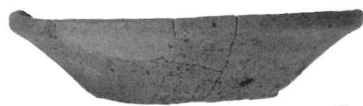
3号遺物集中地点



1



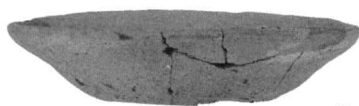
2



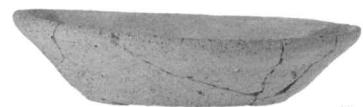
3



4



5



6



7



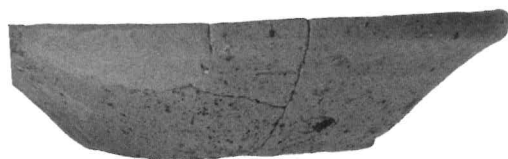
8



9



10



11



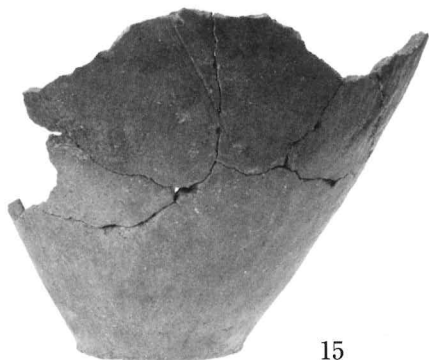
12



13



14

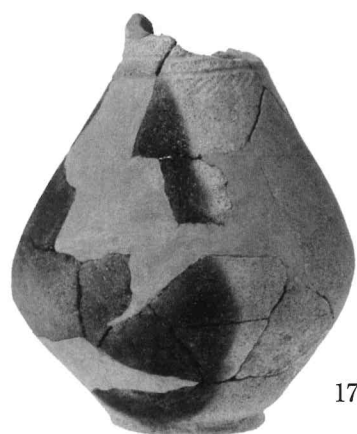


15



16

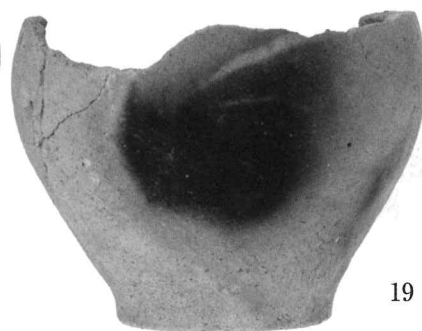
1~6 : 1号溝
7・8 : 2号溝
9~11 : 4号溝
12 : 5号溝
13・14 : 6号溝
15 : 8号溝



17



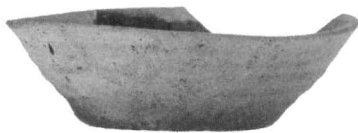
18



19



20



21



22



23



24



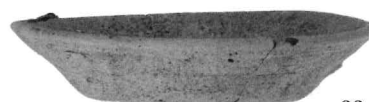
25



26



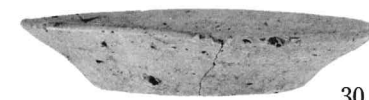
27



28



29

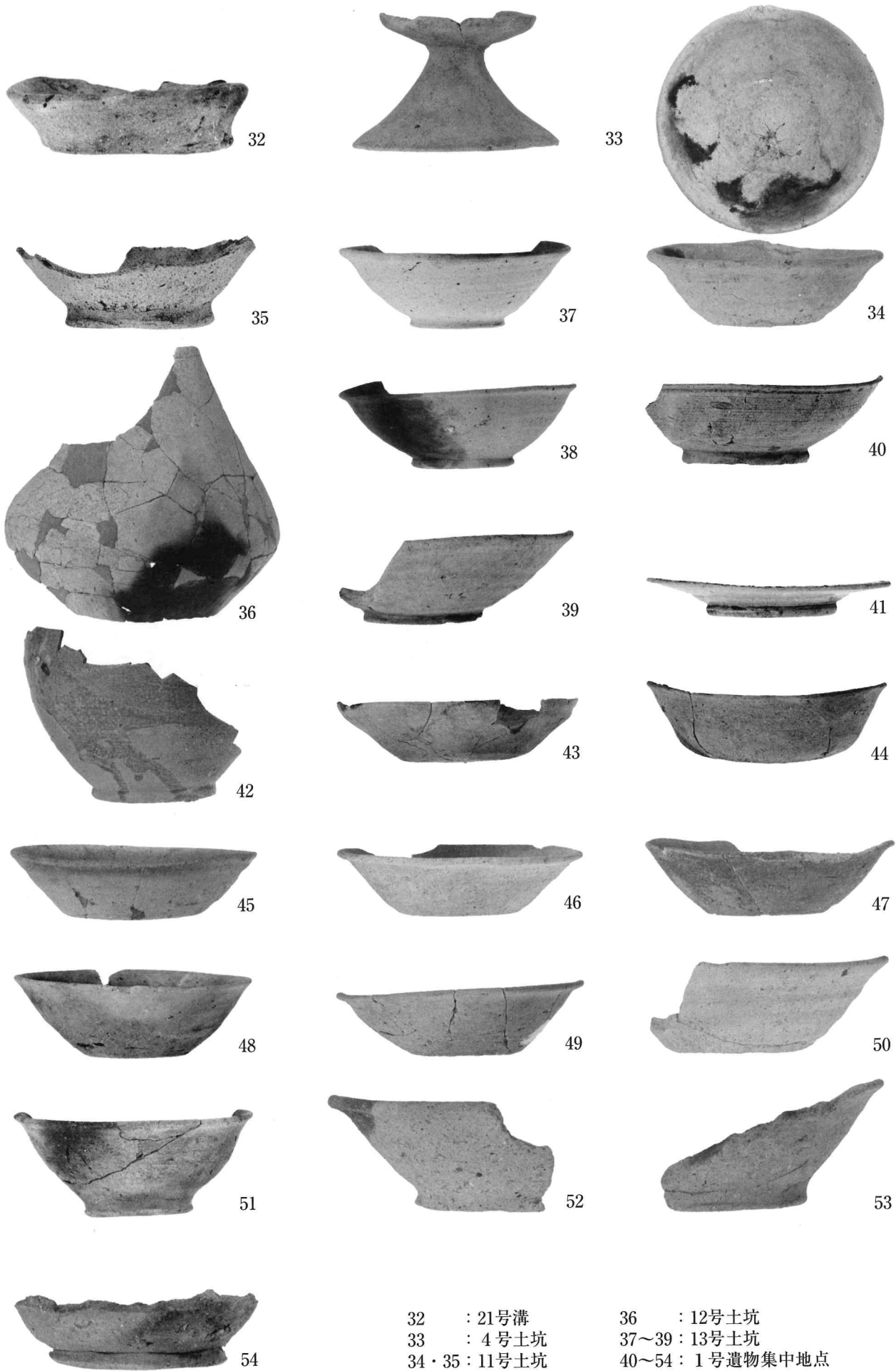


30



31

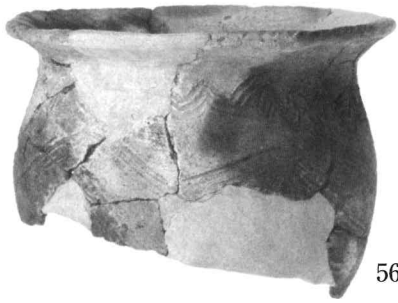
17~27 : 18号溝
28~31 : 20号溝



32	: 21号溝	36	: 12号土坑
33	: 4号土坑	37~39	: 13号土坑
34・35	: 11号土坑	40~54	: 1号遺物集中地点



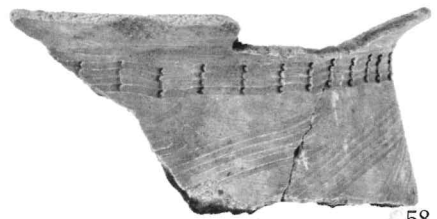
55



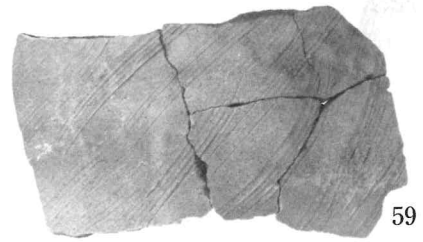
56



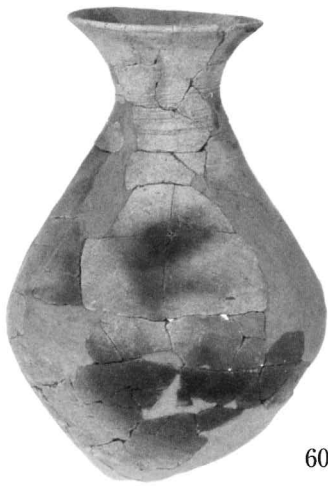
57



58



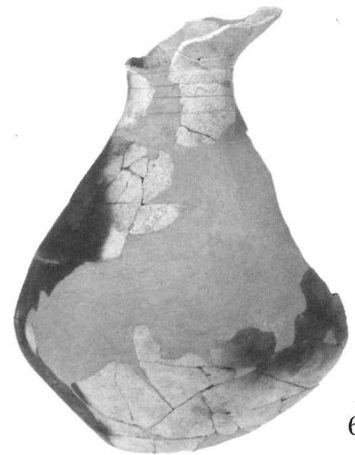
59



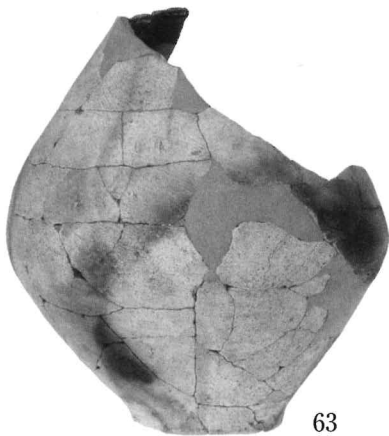
60



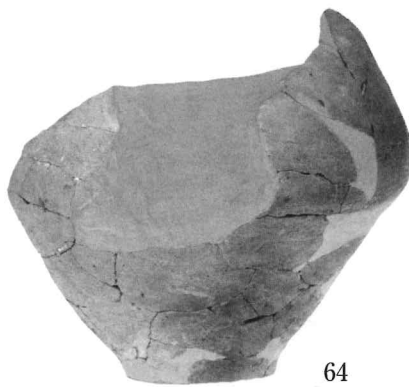
61



62



63



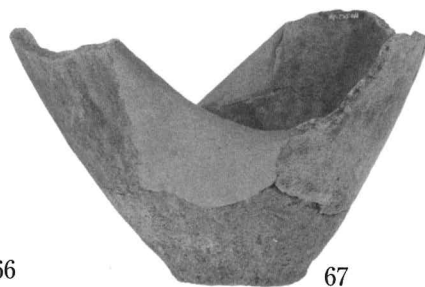
64



65

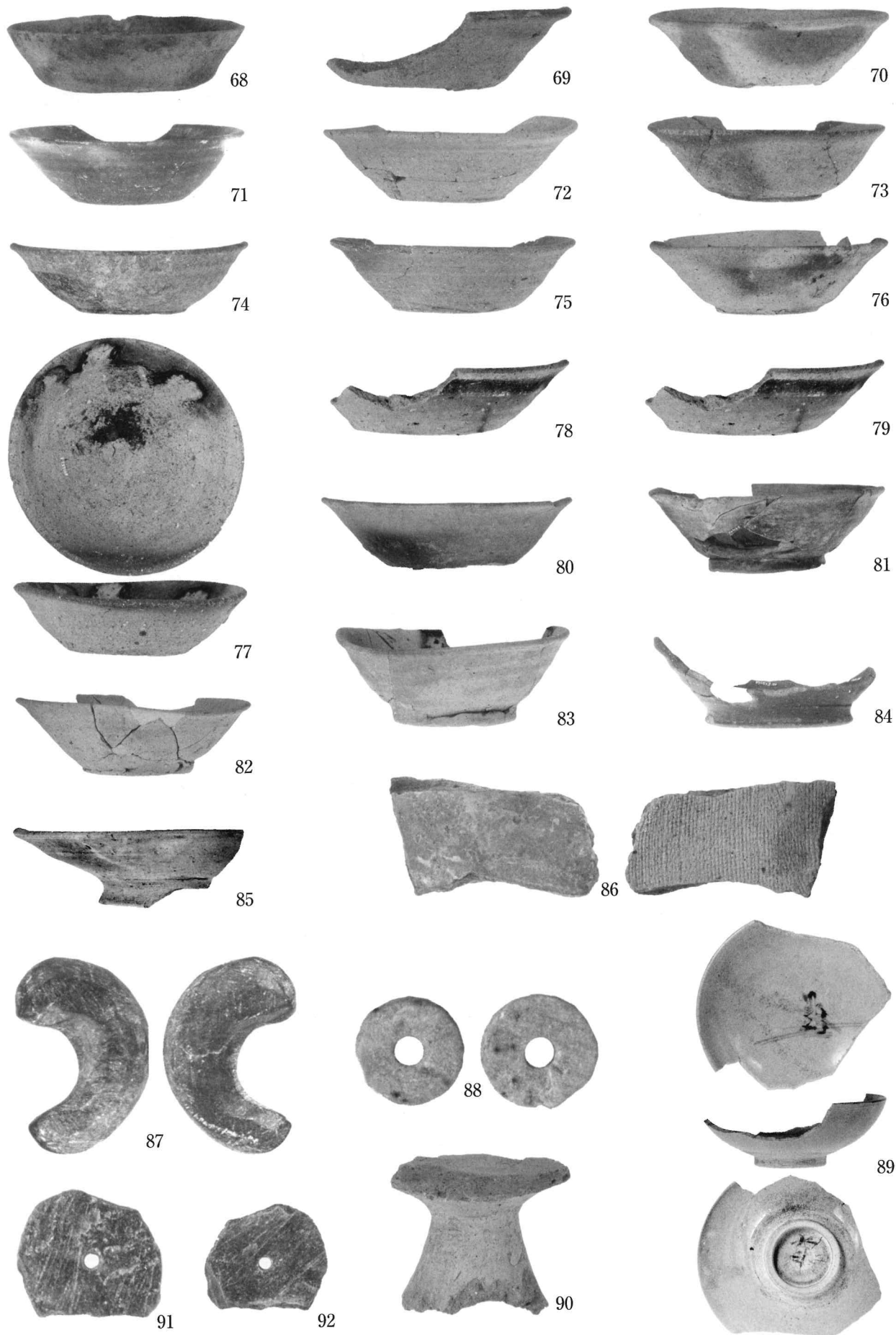


66



67

55~67 : 2号遺物集中地点



68~87：3号遺物集中地点 88：22号溝 89：27号溝 90：30号溝 91・92：2区一括

高崎市文化財調査報告書第206集

高崎城XVII遺跡

2006年 3 月31日 印刷

2006年 3 月31日 発行

編 集 高崎市教育委員会

発 行 高崎市教育委員会

印 刷 野島印刷株式会社
